



友の会会報

TAKAYAMA-UICHI MEMORIAL MUSEUM OF ART

〒039-2501
青森県上北郡七戸町字荒熊内67-94
七戸町立鷹山宇一記念美術館内
鷹山宇一記念美術館友の会

<TEL>0176-62-5858 <FAX>0176-62-5860
<e-mail> takayamamuseum@ruby.plala.or.jp



■平成20年度購入七戸町美術資料 鷹山宇一「山のかなたに」(キャンバス・油彩) 1948(s23)年■

山のかなたに

1970年代の日本文学界は「詩歌」の時代と云われている。その頃の日本は高度成長期に突入し、金銭や利便さなどと引換えに精神を売り渡していた。国民はその日々の不安定さに心の抛り所を求めていたのだろうか。労働者も勤労学生も誰もがみな貧しかったが、よく本を読み学んでいた。

「マルクスやマックス・ウエイバー」を徹して語り明かし「資本論」を語るその口からは、故郷に想いを馳せて「犀星」「白秋」「啄木」を、胸焦がす恋をして「藤村」「晶子」を、そして流々とした人生を感じ「牧水」「山頭火」のうたが愛誦された。それぞれに好き嫌いがあっても、ハイネやリルケと共に、一度は「山のかなた」を口ずさんだ。「山のかなたの空遠く／幸いすむと人のいう／ああ、われ人と尋とねゆきて／涙さしくみ帰るきぬ／山のかなたになお遠く／幸いすむと人のいう」1948年二科展出品作のこの「山のかなた」を見た瞬間私の脳裏に「カール・ブツセ」の、あまりにも有名なこの詩が浮かんだ。

旧制中学の寄宿舎にいた父は、毎晩聞こえてくる夜汽車の汽笛に遙か東京への憧れを巡らす。早くあの汽車に乗り東京で一旗上げたいと願っていたのは父ひとりだけではあるまい。志功ら若い心も皆同じで、ひとり又ひとりと希望を求めて夜汽車の人となっていた。

しかし、山のむこうにある幸せを手にしたのは、いったいどれだけの人々であったのだろうか。私はこのうたを暗唱するたびに、『ふるさと』の三番を思い浮べる。

「志ざしを果して／いつの日にか帰らん」
夢破れて戻ってきた人々にも、青森の山はあくまでも青く、水は清く美しくして迎え入れたのだろう。

48年に16歳年下の母と結婚した父の画風は、それまでと異なり徐々に変化していった。前年に発表した「少年の日の仏陀」から「愛」に移り変わった作品には必ず母がいて、その存在感の大きさに圧倒される。

「山のかなたに」の画面下に描かれている人物の「眼」は母の目である。その静止した眼のなかに、七戸が青森が映っていて、父の大きな喜びが伝わってくる。

故郷を離れ忸怩(じくじ)とした思い以上に、母と暮らした東京での50年の歳月が幸せであったと願いたい。

二人の長い道の中には幾多の試練もあっただろうが、父と母は二人で20世紀を歩んできた。困難と幸せは繰り返してやってくる。「山のかなたに」の題名の如く、どんな絶望の淵に立つても、それを乗り越えて希望を見いだす力を、私たちは持っている。

(七戸町立鷹山宇一記念美術館 館長 鷹山ひばり)

鷹山宇一 生誕 一〇〇周年に寄せて

二〇世紀最大の宗教画家と言われているジョルジュ・ルオーと親交のあった福島繁太郎は、鷹山宇一について、日本における本格的なシュールレアリズムの魁であると言っております。

鷹山先生自身も「ぼくは、若いころはシュールの絵を描きました。シュールは夢幻的な具象ですよ。（中略）ぼくの絵の系列は、シュールでしょうね。」と語っています。

友の会では鷹山先生の生誕一〇〇周年の記念事業の一つとして、会報第五三号を記念号として編集するにあたって、先生の活躍の場であった「二科展」「春季二科展」に発表した作品を中心に掲載しましたが、時系列的に作品を見ていくと、これらの作品に前出の言葉が当てはまると思えます。そして、先生が、生前絵筆をとり、未完に終わった作品が「再現・アトリエ」（美術館に展示中）にあり、この未完の小品に先生の絵の秘密の一端を見ることが出来ます。展示されている鷹山先生の絵を



鷹山宇一記念
美術館友の会
会長 盛田駿造

前にして、いつも感ずるのは「静謐」と「癒し」であり、心の安らぎであります。人間の心のうちには食欲、瞋恚（しんい）、愚癡（ぐち）などの欲望があります。これらを如何にして静めるかは、人間の品性にかかわることです。美には、秀れた絵画には、それと真摯に対峙する時、これらの欲望を静める力があります。人の心のうちに棲む鬼を押さえ込む力があるのです。

鷹山先生は一九九九年一〇月、九〇歳で逝去されました。先生の作品は永遠であり、鷹山宇一記念美術館も又、永遠でなければなりません。

私達はこれに添った友の会の活動をして参ります。



美術館に再現された
鷹山宇一のアトリエ

鷹山ひばり館長、青森県立美術館館長に!

「あいさつ」

鷹山宇一記念美術館
館長 鷹山ひばり

平成二〇年も残り少ない日々となりました。

友の会の皆様方におかれましては、益々ご清祥にてお過ごしのこととお喜び申し上げます。又、平素より美術館にお寄せ戴いております皆様方からの物心両面にわたるご支援、ご協力に、唯々感謝の気持ちでいっぱいでございます。

さて、私事にて誠に恐縮でございますが、このたび、「青森県立美術館」館長に任命され、明年一月より就任いたしますこととなりました。

もとより浅学非才の身ゆえ重責の任にたえないむねを述べ辞退申し上げましたが、ご承知の通り、開館以来知



鷹山ひばり館長

事が館長職を兼任してきました。その現状を考慮しますと、美術館事業の停頓の責を防ぐ意と共に、私のような微力者であれ、お声をかけて戴いたことに思いを深くいたし、受託の決意を固めました。

人間の仕事は一人一人の力によるものではありません。私としては、隠れた努力、陰の力に眼を注ぎ、統制ある仕事場づくりを行い、県民の誇りとなる美術館発展のために一翼を担う覚悟でございます。

十年前、館長として初めて美術館の前に立ったときの感動を、昨日のように想い返すたび、私にとってこの美術館は命そのものだと思感しております。「鷹山宇一記念美術館」は私の「生きがい」であり、そして県立美術館においては「やりがい」をもって任務を遂行する所存でございます。

好むと好まざるとに拘わらず、時には大きな流れの中に入ってしまうことがあります。が、広く学び、人間として機微のある心をもって責務を果たして参ります。

勝手なお願いでございますが、どうかご海容下さいませ。

— 行つてきます —

鷹山館長は平成十一年に当美術館館長に就任。豊富な知識と人脈、優れた企画力で運営にあたり、県内外から高い評価を戴きました。この度のことは、友の会にとつても大変ショッキングなことですが、本県の美術、文化の振興発展に大きく寄与されることを祈念しております。

特集一 鷹山宇一論

つづきの対話

鷹山宇一讃

土方定一

ぼくは鷹山さんの絵のファンのひとつである。批評家がファンになるのは失格だといわれるかも知れないが、批評の背後に、その絵につかまえられることがなければ批評なんて成立するものではない。

緑色の入っているような黒い背景から白と緑のあざやかな壺が浮んで、そこに蝶が飛んでいる。鷹山さんの色彩感はどうも神秘的な作業によるのか、その白、緑、黒の堅牢な魅惑だけで、もう、ぼくをつかまえてしまっている。陶磁器の肌のようにだが、白のところなど宋蓋の白のように静かで、そしていま窯からでてきたように新鮮に呼吸している。油絵具が鷹山さんの窯のなかで、その表現のひとつの可能性をひきだされたよろこびを語っているようだ。

鷹山さんの絵がぼくをまずひきつけるのは、これであるが、この油絵具の表現の可能性をこんなに魅惑あるものにするのは、いうまでもなく、

作家の世界がいつも新鮮で深いことの証明である。

鷹山さんはよく花束を描かれるが、そのなかの褐色も、ぼくも好きな色だ。壺であつたり、花束であつたり、海のなかであつたりで、鷹山さんの世界のなかに、いつも蝶が飛んでいる。これらの蝶たちは、鷹山さんの世界のなかに飛んできたほんとうの蝶のように華麗で、そのことで鷹山さんの世界の空間を暗示し、画面のアクセントとなつている。鷹山さんの画面は蝶を呼ぶ準備をしているが、蝶たちの飛びかうことで鷹山さんのポエジーは華麗な世界と変化する。

鷹山さんの緑は、あるときは海の幻想を準備し、森の幻想を準備し、また最近では船の停泊する港の幻想を準備する。褐色の貝殻と魚と、そしてそこにも蝶が飛んでいる。

鷹山さんの大作で「曠野の歌」という作品がある。白の下塗りのうえに鷹山さんの緑がひろがり、下に大きな新しい切株が描かれ、そこに幼児の下半身が現われ、上の方の空と曠野の遙かな地平線に小さく牛と人が描かれ、ここでは蝶たちは緑のなかに浮んでいる。ぼくには、この作家の薄命の叙情詩のように思われるが、大作となると、この作家は自己の叙情詩を展開しはじめ。

この作家はいつも自己の内部世界をもち、呪術師のように蝶たちを飛ばせてわれわれを呪縛する。が、このとき、この呪術師の姿は消えて、蝶たちとなつて幻化している。現代日本の稀有な幻想画家という外ない。

東奥日報八戸支社落成記念
鷹山宇一展 パンフレットより転載
昭和四十三年五月開催

土方定一（ひじかたていいち）

(1904年～1980年)

美術評論家、美術史家。

岐阜県生。東京帝国大学卒。1951年
神奈川県立近代美術館副館長、1954
年美術評論家連盟会長、1963年『ブ
リュール』で毎日出版文化賞受賞、
1969年神奈川県立近代美術館館長、
1973年菊池寛賞受賞。全国美術館会
議会長。著作集全12巻があり、長く
美術評論界に君臨した。

鷹山宇一の人と作品

鎌原正巳

私が鷹山君と知り会いになったのは、何時ごろからのことだったろうか。

おそらくそれは昭和十二、三年のころだったと思う。というのは私はそのころ早稲田大学出版部に勤めていて、講義録と青年雑誌「新天地」を編集しており、鷹山君には挿画や図版やカットを描いてもらっていたからである。

鷹山君はそのころ四谷愛住町のアパートに住んでいて、同じアパートに仕事部屋を借りていた版画家の齋藤清君の紹介で、私は知り会い、以

来今日まで三十余年の交友である。その間、戦争の時期があり、互いに苦勞しながら生きつづけて今日に至ったが、私自身の境涯には幾多の変遷があつたにも拘わらず、鷹山君は画道一途に生きて来た。

もちろん鷹山君は画道に打ちこんで行ったが、社会事情が経済的に軍事的にますます傾斜して行き、安穩な生活は許されなくなつて来た。

講義録の中には、地図とか幾何図形とか解説図とか、非常に細かな仕事を多く、それを鷹山君は私の依頼を快く承諾して描いてくれた。例えば洋裁や和裁の裁ち方の細かな点について、実際に即した図形を書いたし、地図なども、地図専門の技工に劣らないものを短時間で描き上げた。

鷹山君はしかしそうした仕事を積極的にしたわけではない。食うためには仕方なかったのである。

昭和十五年（一九四〇）、彼は同志と美術文化協会を創立した。そのころの作品には、「日高川」「若き花」などがある。絶体象派といわれる傾向のものである。私は鷹山君が私の新居のために贈ってくれた絵を、二階の客間に飾っておいた。画面の左側に幼児の顔が描かれ、右側は雲の浮んだ空であつた。

私の長女は生れて一年か二年ぐらいいであつたが、鷹山君の画を見ると「こわい、こわい」と言つて泣き出してしまふ。おそらく画面の顔半分が、無気味に思えたのであろう。その画は、のちに戦災で焼かれてしまつたが、今でも惜しいことをしたと

思っている。

戦争がはげしくなると行き、雑誌なども情報局、陸、海軍報道部などの指導下に置かれ、編集プランも何度も改めさせられた。石炭増産をテーマにして取材せよと、半分強制的の命令であった。

私は青年雑誌「新天地」に掲載する記事の取材のために、福島県湧本の常磐炭坑に出かけて行った。そして挿画を担当してもらうために、鷹山君に同道してもらったことになった。二人は湯本に出かけて行き、炭坑事務所で来意を告げた。すでに情報局の方から連絡があったとみえて、直ちに坑内に案内された。

ちょうど大きな斜道が掘られていて、トロッコに乗せられて一番奥の発掘現場に向った。

この炭坑は、中から湯が出ているので、物すごく暑く、湿気も充滿している。案内の坑夫をはじめ、私たちは坑内の事務所で洋服をぬぎ、パンツ一枚で切羽に向った。肥った鷹山君と、やせて骨と皮ばかりの私は、案内の後からついて行った。

この斜坑はこの炭鉱の大動脈に当たっており、従って直径十メートル以上はあると思われる大きなもので、切羽には十数名の坑夫たちが、これも一様に裸で、ドリルを握ってハツパを仕掛けるための穴を掘っている。きけばそこで働いている坑夫たちは何れも朝鮮人で、勤労働員で召集されて来た連中とのことであった。

やがてハツパの準備が出来、何本ものダイナマイトが仕掛けられ、チ

ョークで番号が書かれた。その番号順に点火するのである。その点火の役目は、まだ二十にもならない若い青年で、指揮者の指示に従って火縄をダイナマイトの火口につけて回るシュー！と、はげしい音をあげながら火は穴の奥に入って行く。

一、二、三……と次々に点火されて行く。二十幾つかの点火が終わると正面の岩盤は音たてて崩れ落ちる仕組みになっているのだ。

五、六……鷹山君と私は、そこで恐くなって退去することにして、急ぎ足で斜道をかけ上り、途中にある退避穴に逃げこむ。やがて坑夫たちもつづいて退去して、それぞれ退避穴に身をかくす。

何秒かが経過する。突然ものすごい風圧を感じ、つづいて爆発音がとどろく。瞬間、息もとまるような衝撃を感じて、壁にたたきつけられる。やがて坑内の事務所まで洋服に着換え、二人は坑外に出た。

その日は、湯本の町のうらぶれた宿屋に泊り、食糧事情が次第に悪くなりはじめた頃であったが、さすがに田舎町だけあって、鶏肉や山菜料理で、特に炭鉱側からの配給の酒もあって、二人は久しぶりに酔ってしまった。

鷹山君は裸になって泥鰯すくいを踊り、私は得意になって故郷の木曾節を唄った。鷹山君の踊りは見事なもので、この踊りのコツは畳の縁をまっすぐに伝わりながら踊ることだと言う。私も彼の真似をして踊ってみたが、縁を伝わって足さばきを交互にすると、自然に身体が奇妙にお

どる恰好になる。そしてざるを持つ仕種の手の動きも、左右に振る腰の動きも、おもしろく滑稽に感じられるのである。

このような鷹山君の坎のよさは、彼の描く絵の世界にも他人の気のつかない部分で独特の味を出すのではなからうか。徳利を持って「ヨカチンチン」を演じながら、津軽弁で抑揚をつけて感に堪えぬように言うセリフ廻しにしても、まことに見事なものである。

常磐炭坑の記事は「新天地」に挿画入りで掲載したが、陸軍報道部と情報局の係官から激賞された。鷹山君の挿画が、汗みどろになって働く朝鮮労働者たちの姿を、細密画で表現したその技巧の見事に感心したためであろう。

昭和十九年（一九四四年）、鷹山君にも召集が来て、横須賀海兵団に入団することになった。

そこで、彼の住んでいる四谷愛住町のアパートの一室で、斎藤君と私の三人で、ささやかな壮行会を催した。酒類などは持ちよりで、町会から出征兵士への特配として配給された一升を加え、にぎやかな会となった。

折から青森県の故郷から鷹山君の母堂も上京して来ていたので、いつしよに加わってもらった。鷹山君はこの母堂によく似ていた。しよっちゅう「宇一！宇一」と息子に呼びかける母堂はほんとうに慈母という感じであった。宇一、宇一が、私には「ウィッチ、

ウィッチ！」と聞える。何くれとなく身の廻りの世話や、軍隊に行つてからの注意事項などを、ポツリポツリと言葉少なに語る母堂を見ながら、三十を過ぎてもまだ独身の彼のことはこの母堂にとつてもいろいろ気がかりのことが多いだろうと、私はひそかに思ったりしていた。

翌年終戦となって復員して来た彼は、再建二科会会員となり、画道一筋に専心するようになった。

そのころは、本郷白山のそば屋の一室を借りて住むようになっていた。私の方も上野の博物館に勤めるようになり、二科展の時などは毎回美術館に行つて鷹山君と会うようになった。鷹山君は二科会の事務所にいることが多く、その時は接待用のビールを出してくれたりして、楽しい時間を過ごした。

このころ、鷹山君は長い独身生活に終止符を打って結婚した。いまの奥さんである。

そして画の力も戦前のそれとはちがって、新しい彼独自のスタイルを創造するようになった。

ブリジアンを基調とした静かな画面に、動きのある蝶をあしらった独自の画境を展開するようになった。それは今日までつづいた彼の絵画の基本線であろう。

「少年の日の仏陀」（一九四七年）、「漂泊の歌」（一九五〇年）、「静物・開墾地」（一九五一年）、「遊蝶・花B」（一九五八年）、「波濤の歌」（一九五八年）、「静物」（一九六四年）などがある。鷹山君は、その恋人の奥さんと幸

福な生活にはいり、三人の娘さんを生んで、家庭的にも恵まれた境涯にはいるようになった。

「早春譜」(第五回現代日本美術展)、「遊蝶花」(第六回現代日本美術展)、「孔雀と少女」(第七回日本国際美術展)、「波濤」(第七回現代日本美術展)と、次々に鷹山芸術の真髓を發揮して行った。

そして第五十二回二科展の「高原・湖」で内閣総理大臣賞を受け、第五十三回二科展の「森の風船」(「光の中に」で、鷹山芸術の一つのピークをなすに至った。

昨年の夏のはじめ、私は久しぶりに立川市富士見町の鷹山君のお宅を訪ねた。

立川駅から南口の商店街を抜けて多摩丘陵の見える道をしばらく行くと、彼の住んでいる団地に着く。

アトリエからは、近くに農事試験場の森のある丘が見える。

「一年前までいた住居(文京区浅草町)は、電車通りに面していて、騒音に悩まされたけど、ここに移ってから、静かすぎて、しばらくの間は、却ってぼんやりしてしまつて、仕事も手につかない有様でしたよ」鷹山君はそう言いながら、独得の一オクターブ高い声で笑つた。そして更につづけて言う。

「何しろ空気がおいしいし、夜はあたり一面蛙の合唱が聞えるし、野生の鈴虫が窓の下で妙なる鳴き声を聞かせてくれますからね。たまに飛行機の爆音があたりの空気をふるわせるけれど、慣れてしまえば平気に

なりますしね」

それから暫くの間、私たちの共通の二、三の友人たちのことが話題になった。

「斎藤君は版画家として、いまは押しも押されもしない世界的な存在になりましたね」

「そうですね。アメリカの愛好者から、ぞくぞくと注文が来て、その制作で忙しい、と言っていましたよ」

「彼も相当苦労してきましたからね。いまの報いられた状態は、当然といえば当然のことかもしれませんが」

私は斎藤君の面影を脳裡に思い浮かべながら言った。

それからやがて鷹山芸術の本質に迫る質問が私の口から出た。

「あなたの作品には、蝶がよく出て来ますね。よっぽど蝶が好きとみえますね」

「ぼくが蝶を描くのは、画面に動きを出したいからです。例えば花を描くと、花は静止の状態で動きがない。その場合、これに配するに動きのある蝶をもつてくれば、そこにはじめて絵に動きが出てきます。」

例えば人間と孔雀を描くとします。その場合、蝶は両者を連絡する役目を果たすわけです。果物を描く。そのバックは山脈とします。雲とします。すると果物と山なり雲なりの間に蝶をもつてくると、画に流動性が生じます。

六号の画の場合には五匹の蝶を、八号の場合には七匹を、という具合に、大体奇数の蝶を配します。だけど、

大きな絵でも九匹は描かない。また十、十一と沢山の蝶をあしらうことは逆効果になるので、決していたしません」

鷹山君はさらに言葉をつづける。「ぼくの絵は、描き込む絵です。色を重ねて、とことんまで描きこまない気が済まない。ところが外国の、例えばルネッサンス時代のものを見て、絵にすばらしい動きがあつて、強い画面を構成しています。」

大きな回転があり、生きいきとしています。ミケランジェロにしても、ラファエルにしても皆然りです。しかも回転しながら静かであり、澄んでいます。

ぼくなんか未熟で、とうていルネッサンスのあの高貴な、澄明な画面を作り出せない。そこでぼくは考えた。自分なりの動きのあるものを出してみようというわけです。

そこで蝶を描くようになったのですが、蝶を描くと、そこに小さな色彩と静かな動きが画面に生れてくる。花瓶とか、花束とか、みんな動きのない静止したのですが、これに蝶を配すると、絵がゆるやかに回転してきます。ぼくのねらいはそこです。蝶は小さな動きしかしませんが、色彩は多様ですし、形もおもしろい。

また人物、風景を描いても蝶が出てきます。蝶が出てこないといふ絵が収まらないのです。いまはそれがぼくの癖みたいになっています。今の多くの日本の画家は、描きこむことと、動きというものをあまり考えないのではないか。だから形式的で、いつも低迷しているように見えます。

しかし、明治、大正の画家たちは、かなり描きこんでいますよ。外国の作家は画面の粉飾ばかりでなしに、裸かになつて描きこんでいる感じがす。その根性が日本の作家とちがうところですよ。外国の若い作家で、細密な絵を描いて認められている人がいます。それは形式だけでではなしに、内面へと深く掘り下げて行く努力をしているからでしょう。ただ細密に描くだけでなしに、そこに世代の新しい感覚があり、超現実的な魅力さえあります。

ぼくは、若いころはシュールの絵を描きました。シュールは夢幻的な具象ですよ。ぼくはこのところ、花と蝶をテーマにして描いてるけれど、考えてみれば、ぼくの絵の系列はシュールでしょうね。最近になって、ぼくはしみじみそう思います」

鷹山君は、そこで言葉を切った。自ら自分の芸術を、率直に語る彼の真摯な態度に、私は打たれていた。

鷹山君は、ここ四年ばかり、理由もなしに目まいに襲われることがあり、閉口しているという。

身体の調子はよく、健康状態がづいてるのに、目まいする原因はつかめないとのこと。

「ぼくには邪霊がくっついています。目まいに襲われるのも、邪霊の仕業にちがいないと、その道の人から言われましてね。」

その人の言うことには、ぼくの前祖代々の墓の下にいる霊が、墓の土台をコンクリートでかためられたた

めに、霊が宙に浮いている。早くそのコンクリートを除かないと、ぼくにくつついている邪霊をとり除くことはできない、早くそれを撤去しなさい、とのことなのです」

そこで鷹山君は、めまいをおして、奥さんを同道して郷里の青森県七戸に行き、お寺と石屋に頼んで、言われたとおりにしてもらった。

その日、ちょうどあの十勝沖の大地震に遭遇した。

不思議なことに、その地震を契機として、彼の邪霊の一つはなくなっ

てしまった。「まだもう一つの邪霊がぼくに

つついています。しかしこれも間もなく退散するでしょう」

「えいっ！」

と、大声で叫んだ。禅僧がはげま

しの声で喝を入れる呼吸である。

私はびっくりして彼の方を見た。あ

たかも喝を入れて邪霊を退散させ

ようとでもしているようである。「ぼくはこうして、一日に何回も

叫ぶんです。すると気持がさっぱり

して活力が出ます。それでまた絵を描くわけです」

彼はそう言いながら、明るく朗らかに笑った。その彼の表情を見ると、もう一つ残っているという邪霊も、すでに消え失せてしまったかのようであった。

鷹山君との長い交友の間に、私から学んだものは、数多い。彼はその根性の中に、いいかげんな妥協とか、安易な寛容とか、おもねりと

いうようなものは、微塵もとどめていない。と同時に、自分のこうときめたり、判断で正しいと信じたことは、頑として譲らない。自分にきびしいと同時に、他人に対しても峻厳であった。この精神は、芸術家としては貴重な精神で、独創的な仕事を

つづけるためには、必要不可欠なものである。鷹山君がユニークな独自の画境をきり開いたのも、その底

にこのような面魂が根をおろしているがためと私は思う。

彼は孤独である。孤独こそ彼の芸術に深い叙情性と、夢と、ロマンチ

シズムを賦与する秘密ではなからうか。彼はいま邪霊との戦いをつづけて

いるが、これは彼の孤独にとつて唯一の仕甲斐のある戦いであろうと

思う。やがて彼は、邪霊を克服し、新しい次の段階へと突進して行くに

ちがいない。鷹山芸術の新しい花が開く日も近いことであろうと、私は

信じて疑わない。彼の中に、生来の類まれな根性がある限りは、私の希望も必ずかなえられるにちがいないと思う。

好漢、自愛して芸の鬼とならんことを祈る。



季刊美術誌 「求美」 70涼風号
(昭和45年7月1日号) より転載
鎌原正巳 (かんばらまさみ) 作家
(1905年〜1976年)

長野県出身。京都大学中退。早稲田大学出版部にて雑誌編集等に携わる。昭和二十二年〜昭和四十一年、東京国立博物館に勤務。著書として「青春の家」「失敗を成功とせよ」のほかロシア文学の翻訳も手がける。昭和四十五年文化財功労者

作家登場「鷹山君」

松島正幸

街の画廊や友人達の個展会場などでよく顔を合わせた鷹山君に、久しく会わないので心配していたら、この五年ばかりの間は、挨拶をして頭を下げると眼がくるくる廻って、倒れるとか、兎角、頭がふらふらする病気にかかって、あまり表に出ないという話。

それでも街の画廊や、展覧会などには、少しも老化を見せない意欲的な作品を発表しているの、一方では安心してた。最近では、カイロプラスチック療法とか、弱電気療法とか、良いと思う療法は、皆んな取入れて、健康も追々回復している由、それで、大好きな酒も煙草も禁じて養生専一にしてるとの便りがあ

った。若い時の鷹山君は、およそ病気などというものには縁のないほどたくましく、酒も強いし、健康そのものであった。

鷹山君との交友も考えてみれば、もう四〇年近くもなるだろう。彼より二つ歳下の私が、彼よりずっと早く結婚してから、もう三五年にもなるのだから、まだお互いに、独り者の時からの交際で、過ぎ去ってみれば、早いものだ。

鷹山君とは、その頃よく呑んだ。金がなくともなんとかなった良き時代でもあった。酒というと、相好をくずして、御機嫌になる彼ではあったが、普通の酒呑みのように、酒に淫するということも無く、だから他人に迷惑をかけるようなこともないし、意外と思う程、律義で、義理堅く、はじめがあった。酒を永く呑み続けるためには、メチオニンなどを呑むようにと、教えてくれたのも彼だし、そうした用心深さもあった。しかし兎角実によく呑んだ。そんなわけで、鷹山君というと、酒の思い出が多いので申訳ないが、私などは、あれは宇一ではない、ウィッチだといつもいつていた。

彼の版画が、二科に初入選したのは、昭和五年で、私も同年の初入選であった。(私は次年から独立展に移った)その頃の二科入選というのは、現在では考えられぬ程難しく、少人数で厳しかったのだが、彼の作品は、当時としては一番新しいシチュールレアリズムの傾向での、洒落た、あく抜けのした美しい画面で、それ

が初入選で二点、次の年は、四点、続いて三点、二点、二点と、連続するのだから、彼の才能の豊かさを知るには充分である。

個性豊かな、巧緻で、美しい詩情溢れたロマンチックな作品ばかりであった。当時、「詩法」という雑誌が出ていて、安西冬衛とか春山行夫とかの詩がのつていたが、特に安西冬衛の詩を彼は愛していたようだ。

二科展には初入選から連続して昭和十一年まで出品していたが、十二年以後は二科出品をやめて、友人達と絶体象派協会というのを創立して日動画廊で第一回展を開いた。メンバーは山本敬輔、高橋迪章、広幡憲齋藤義重、鷹山君の五名である。そのうち戦時中に高橋君が戦死、続いて広幡君が終戦直後に事故死した。山本君も、永らく従軍のあと、癌で亡くなったが、いずれも優秀な才能の人ばかりで、その死が惜しまれる私には親しい人達ばかりである。現在、もりもりと活躍しているのは、齋藤義重君と鷹山君の二人きりだ。

その創立の祝賀会を銀座で開いた時、やはり故人になった詩人の小熊秀雄氏が、詩を朗読したり、滝口修造、江川和彦氏の顔もあった。絶体象派という名称のことで、「作家が絵を描く態度は、常に絶体でなくてはならないのだ」というようなことを、鷹山君が、説明したのを覚えている。その頃の鷹山君の出品画の何点かを、私が所蔵していたのだが、戦争末期の頃、他の絵と一緒に、巻いて防空壕に入れたり、あっちこちと疎開して歩いている間に、絵具がひどく剥

落してしまったり散逸してしまつて、今は手元になく本当に申訳のないことだと残念に思う。

絶体象派展が何回続いたのか、或は当時の社会情勢の中で各人の動きがはげしかったのかよく解らないのだが、昭和十四年に美術文化協会創立に鷹山君が参加し、終戦近くまで出品していたようだ。昭和十九年に遂に彼にも召集が来て、横須賀海兵団に入団、海軍航空隊に配属されて終戦を迎えることになるのだが、戦死しなかったことをお互いに喜びたい。私もその頃は、軍属で北満に、続いて千島ウルフ島などに従軍画家として働いていて、彼と会うこともまれになった。

話が、とりとめが無く前後して恐縮だが、昭和八、九年の頃、高円寺の松木満史氏（国画会）のアトリエの二階に間借りしていた頃、彼が深酒をして眠り、煙草を吸った火が布団に燃え移り、危うく火事と焼死をまぬがれて、朝早く家に来て、布団を持って行ってやり、オーバーなどもやつたりしたのを覚えている。

しかし別にそんなことは特別のことでも無く、お互いで、こつちも無ければ鷹山君のおごりで呑んでいたのだろう。又、高円寺の一ぱい呑み屋の二階などにも、彼が下宿していたこともあり、こんな便利すぎる所たこともあり、こんなようじや、いよいよ酒びたしになると思つたこともあった。すぐその近所に、結婚はやほやの私達の借家があつて、そこには彼の他に死んだ飯田操朗や塚原清一、三芳悌吉君などがよく遊びに来てく

れたものだった。

よし俺も結婚する。眼鏡をかけた女は嫌いだから、そうでない女なら良いなどと、毎年来る毎にいうのだが、なかなか結婚はしないで、口ぐせはいつも同じだった。私の女房は、眼鏡をかけていたが、そんなことは少しも気にしなかった。

当時、鷹山君は、齋藤清君などとも、親しく、版画の方では、鷹山君の方が先輩ではなかったかと思う。その頃、近所に住んでいた棟方志功君とも、彼は同郷の関係で親しく、二人共に、津軽弁で話をするので、こつちの方は、何を話しているのやら、解らず、かなり永い間、困つた記憶がある。特に、鷹山君は早口だから尚更である。それで、いいかげんの返事でもしようものなら、憤慨されるのだったが、こつちの方は、良く聴きわけられぬこともあつたわけだ。相当の気短かで、何を怒っているのか、見当のつかぬこともあつた。

何故あのように優れた版画の方をやめて油絵など描くのか、惜しいなあと何度も彼にいうのだったが、あんな版画を作っていたら、飯の喰い上げでくびをくらねばならぬ、マツピラ、マツピラと、やめてしまつた。

現在の版画時代のことを考えると想像出来ぬ位版画など売れぬ時代であつたし、(もつとも油絵も同様であつたかも知れぬ)たしか鷹山君はその頃、平凡社の百科事典などの細かなさし絵、カットなどを内職に描いて生活していたのでは無かつたか

と思う。仕事のさし絵も、小さなメダカを何十匹も描くような根気のいるものだった。

昭和十年夏に私達は今の鷺宮に小さなアトリエを新築して高円寺から移つたのだが、そのアトリエ開きには、鷹山君や海老原先生夫妻など、二、三十人も集つて徹宵呑み明かし、素裸に赤い腰巻きで踊っていたのが鷹山君で、次の日の朝は四、五人がそのままアトリエでのびており、鷹山君がいないので探すと、アトリエの窓下に落ちてそのまま眠っていた。彼の、仕事をする時は、孤独でひっそりと室に閉じこもつてするのは昔も今も同じだろうが、どこか職人氣質の名人肌みたいなものが昔からあつて、彼の描いているのを見たことは無いが、こつこつと描いてふいてみたり、サンドペーパーをかけてみたり、すごく技巧派で凝り屋だから、先ず自分が一番楽しんでるに違いない。

鷹山君の絵は女性にもてるだろうと聴くとその通りで、水商売のマダム連とか、ファンには女性が多いと喜んでいた。しかしその話し方も酒呑み特有の大ぼらではなく、自分を売り込むような卑屈さはみじんもなく、彼の場合は素気なく誠にすがすがしいものであつた。偶々会つて呑みに行く時も昔ながらのおでん屋みたいな田舎じみた素朴な所が好きで、豪華な肩のこるような所には一度も行ったことがない。或は昔の貧乏生活が、庶民的な習性を離脱させないのかも知れない。

その頃の画家の貧乏ぶりも、特別

の人はあつたらうが、私の周囲は皆貧乏で、しかし、別にそれでじめじめしたものには無かった。絵など売れることなどが珍しいことであつたし、棟方志功氏の貧乏ぶりなど徹底したもので、飯釜で十銭、浴衣で十五銭などで、質屋に入れていたのだから、他もおして知るべしだ。それを特別に恥ずかしいことだとも思わなかつたのは、若さのせいばかりでは無い。棟方氏など、手ぬぐいを首に巻いて下に浴衣、表にはよれよれの二重まわしを着て、天下の形勢は、景気は如何ですかなどと、今考えてもおかしくなるような会話をしていたものだ。その頃の鷹山君は、日本では岸田劉生を、外国人では、シヤガールとか、デューラー、ルドン等を尊敬して、よく話題になつた。

終戦直前の昭和十九年、二十年は、どこの会でも、展覧会を開くことが困難の状態であり、私も家族を房州から札幌の方に移した時に終戦になつた。

終戦直後に、再建された二科会に、鷹山君が会員として迎えられて、今日に至つたと思う。作品はその頃からはつきりとした方向を示し、現在のピリジアンを基調とした静かな画面に、蝶や花、或は海と魚、森などが、リリカルな色彩で登場してくる。若い時からの诗情は失われることが無いが、考えてみれば、やはり形式の上では、いろいろの変化が彼なりにあつて、一步一步、独特の鷹山のフォルムを完成したことがわかる。

日本画壇では貴重な存在である。
鷹山君の結婚直後、奥さんと二人

の娘さんの幼ない時に会つたとき、私は一度もお宅を訪問せず、その娘さんの成人ぶりも、風の便りに聴く位。どうもお互い、人生の持時間が短くなつたせい何かと忙しすぎる。鷹山君からの近信では、酒も煙草もやれないのだから外出する用もないし、とんと世間の様相もわからずにいたら最近やたらと画商が来るようになった。これは一体、どうなつているのか不思議で仕様がな、と彼らしく書いてくる。何も不思議はない。四十年余も絵画一筋に地道に描き続けて来たのだ。もつともつと認められてもよいのだ。



美術誌「みつる」No. 774

昭和四十九年七月号

特集 鷹山宇一より転載

松島正幸 (1910年～1999年) 札幌生。太平洋美術学校卒。昭和六年二科展初入選。二十二年独立美術協会会員。五十五年紺綬褒章。平成二年北海道岩見沢市に松島正幸記念館開館。

鷹山宇一の人と作品

荒城季夫

今から二十数年も前のことである。当時の日本は、すでに満州事変などもあつて、後代の危機をはらんでいたが、何といつても第一次大戦らしいの好潮に乗つて、世間一般は香気な時代であつた。一時的ではあつたけれど、何も彼にもが伸び行く力にみながつていた。

その頃、早稲田の戸塚に日本美術学校という私立の学校があつた。この学校は非常に古い歴史をもつていて、始め故紀淑雄氏の私塾のような形のものであつたが、私が勤務するようになった昭和四、五年頃には日本唯一の私立美術学校になつていった。そしてその後、多少の増減はあつたが、盛んな時には二百名近くの学生があり、小ぼけな校舎に将来の巨匠、大家を夢む画家のタマゴがいっぱいつまんで熱心に勉強していた。学校とはいつても、むろん現在の官立芸大やその他の短期芸術大学のようには組織立つたものでなく、謂わば実修研究にいくらか学問を加えて研

究所めいたものであつたに他ならぬ。しかし、それだけにまた、自由な空気が先生、生徒の間にしみこんで、芸術家を生み出すにふさわしい雰囲気をかもし出していった。この十年間は、私にとつて全く楽しい思い出の種である。私がこの学校に係する以前には、林武、峰岸義一、服部正一郎なども籍を置いていたという話だが、高田の馬場に近い戸塚の一角は、狭いながらとにかく、この時代としては珍らしい芸術的コーナーだつた。

二科の鷹山宇一や織田広喜、あるいは光嵐会と日展にいる桜田精一、日本画家の村松乙彦、彫刻家の円鏝勝二、ガラス工芸の淡島(旧姓小畑)今は新聞記者になつている平川富太郎、日野耕之祐、伊藤浩三などという面々は私がちよくせつ教えた異才である。まだ他にも美術界に進出している作家が少なくないが、このうちでも特に鷹山は学生時代から非常に個性の強い絵を描いていた。とりわけ、手の込んだ版画の技術は大したものであつたように記憶している。今日では油彩専門になつて、その方で頭角をあらわしているが、二科会出品の初め頃にはやはりその版画を出していたようである。版画がようやく認められ出した現在、もし彼がもう一度あの版画を発表したならば、この方でも一躍名を成すにちがいない。と私は信じている。あるいは版画家としての鷹山を知らない人があるかもしれないので、ちよつと披露しておきたいのである。鷹山は今なお郷里青森なまりの言

葉で素朴に語る純情愛すべき男である。なかなか雄弁で、小肥りの精かな人間である。東北生まれながら、むしろ多血質的な南方人にみえるのであり、意志のつよいところは、やはり北の人である。酒も相当たしなむようだし、暗い影はどこにもない明るい性格である。

それが、みんなから愛されるところだろうが、絵の方はひどくデリケートで、近代的なロマンチズムを深く底に湛えている。謂わば文学的であり、哲学的でさえある。それについて、絵の肌がキメこまかく、造形的にもしつかりしている。抽象と現実の間を行く内省的な道を歩む彼は、やはり思索的な北方人であるといえよう。



美術誌「造形」 No. 14

昭和31年4月1日発行

「特集・現代優秀作家」より転載

荒城季夫（美術評論家）

著書「秘められた名画集」「古代美と近代美」「印象派の星座」ほか多数

特集 二 作家の記録

蒼の東洋的幻想

鷹山宇一

芸術は人間に与えられた最大の高尚なる亨楽として考えられ、絵画、彫刻、工芸品等を芸術するということは、古来より民族の中でもすぐれた人間として勇武の人と共に待た遇されていたようである。この民族的な芸術はその民族の特徴をより多く含むためもあってか、優性な民族である程芸術作品もまた秀作であったことは史上で見られるところだ。今日のように世界の交通機関がとみに発達し、国と国との距離が急速に短縮されて、各地の発展しつつある芸術作品とその作家の交流が激しく行われると、自主的であるべき民族性の自覚が自然に失われてゆくようにも思われる。これは民族の自覚によって芸術を追求するという活動に移る前、既に東西交流の激しい、上下左右のゆさぶりに幻惑されて、自己の立場が発見され得ぬまま、ずると世界的な芸術の普遍性に惰してゆくことが考えられるからである。このような事態がおこると世界連邦説も手伝って、しまいに私の作品は

一体誰の作品かと区別のつかない混乱がおこりかねない。私はそのような結果を恐れるのである。現在の日本の洋画は伝統の短かい段階にあるといっても、洋画の渡来後百年近くも経つのであるから唯いたずらに欧米崇拝ばかりでは芸がな過ぎる。我々日本人自身が黄色に着色せられ、欧米人から決して同志として心から迎えられない事実をもう少し考え、民族性を持つ芸術を堂々と胸を張って制作しあげる意欲をいだけ必要があるのではないか。現在一部の日本人のように、必要以上の外国作品の紹介や、卑屈な程の賛辞や低頭、又海外作家との交友を最大の誇りとする前に、我々は先ず自己の立場を強固にし対等の付き合いをする独自の勉強の法を考えるべきで、私は日本人の内弁慶的なへつらい根性を恥じるのである。

画業生活三十五年といえればそれ相應の作品があつたり、作家の地盤も固まつているらしいのであるが、私の場合過去を振り返って全く慚愧に堪えない程秀作も地位も無く、貧しく素朴な記録だけが残っているだけである。唯少年の頃から東洋的な東洋人的な絵画を描こうと思つて、ことだけは事実であつた。これは当時の生活環境や、古事記物語、印度或いは支那・朝鮮・満・蒙等の童話本などの読書の影響から、妖しく茫洋とした深く蒼い東洋の幻想に限り、然しこの東洋的幻想も絵の修業に入るに次第にどこかへ消し飛んで、いつのまにか西欧美術の影響の前に

手も足も出ないまでの状態におかれたのであつた。これは当時の日本洋画界が成長期にあつたことと、第一次世界大戦後の欧州美術界はそれ迄暗い重い戦争のために圧迫されて、沈滞していた一群の画家達の制作意欲が、戦勝国・戦敗国とにかかわらず急激に上昇して、花園が一時に花盛りになつたように新しい形態の絵画の主義主張が目覚しく発表され、それ等に煽られ文化後進国の日本の若い画家達はその絵画に憑かれたように幻惑された時代でもあつた。唯今日のような発達した交通機関がなかつたのと、パリ中心の絵画時代であつたためか、生の作品の渡来が数少なく多くは写真、色刷、或いは人気作家の弟子の影響を享けて帰国する人々の作品によって、その作風の片鱗を知ることの方が多かつた。それでも我々若き世代人はその未知を吸収しようとする時代でもあつた。そのため私がひそかにあこがれていた民族主義の考えも、以後この吸収運動に巻き込まれうやむやにおき去られてしまったのである。第二次世界大戦の末期ようやく日本敗色の兆しが見え初め、軍国政府による進歩的前衛団体、作家等に干渉弾圧が加え初められる迄、全くこの民族的郷愁への思索が立ち切られていたことを告白しなければならぬ。この圧迫により過去の記憶が甦えり、ようやく民族意識をとりもどしたことであるが、然しこの民族意識は当時の日本の軍国主義的野望に協力同調するような野蛮なものでなく、大きな意味での東洋的幻想へのあこが

れの復活であった。これは終戦間近に海軍航空隊に召集されきびしい茨の生活の中で思考で益々強固になり、如何なる傾向の作風に進むかも熟慮した時期でもあった。この民族的制作への欲望も突如の終戦宣言、帰郷、精神的物質的の欠乏混乱のためか、全く夢遊的な不可解な状況のもとにおかれ、この無気力な放心状態から脱する迄の耐えがたい時代が数年流れている。時を経て現代世界画壇の活発な交互の接触を見ると、今こそ民族の誇りと自信をもつ制作に踏み切る時期ではないかと心新たに構えるものが湧いて来るのである。私の郷里は青森県の七戸である。明治四十一年ここで生れた。七戸は十和田湖に四里、小河原湖に三里、青森県を縦走する八甲田山群の高田大岳のすそ野はるかに開けた小盆地に位置し、旧盛岡南部氏の支城のおかれた封建的な城下町で、南部駒の中心産地でもあった。小地主であった曾祖父のもとに少年期を過し小学校時代から絵を好んで描いたのであったが、当時片田舎の風習で直接写生することよりも模写をすることが常識とされ、盛んに武者絵や陸海軍の戦争画、或いは雑誌の口絵表紙を模写して楽しんだことを覚えていた。この小学校四年の当時受持教師であった歌人青山哀囚の文学的な薫陶は今なお脳裏に残るのである。この教師に接することがなかったら恐らく私は別の道に進んでいたことであろうか。少年の日の楽しい思い出がこの一年に要約されて胸に残っているのである。

大正十一年小学校卒業後青森市に出て県立青森中学校に入学出来た。学校での図画教育は期待に反して愚劣極まるものであった。手本の模写の域から出ていかなかったからである。中学二年頃から油絵を描き始めていたが、ゴッホ、青木繁、岸田劉生に傾倒し、中川一政の素朴なロマンに感動し、ブラマンク、佐伯祐三の作品に驚歎した。次いでカンデンスキー、シャガール、未来派、立体派の作品に及ぶのであったが、地方中学校に在ったためそれ等の作品は生で見ることが出来なく、全部美術誌や画集の写真や色刷であったが、その作風のすばらしさはおぼろげ乍らも若き日の心をとらえるに充分であった。今考えても不思議なことに私は油絵独学入門当時からアカデミックな写実画は描かなかつたことで、友人達は手本のような普通な写生画をしていたのに、私一人が別の道を進んでいたようである。この中学時代の一大収穫は、当時青森市で奇人扱いにされていた異才棟方志功を知つたことであつた。棟方との初対面は友人の紹介で市内の善知鳥神社の堀端であつて、彼が日頃出入りしている野間齒科医院から何枚かの油絵を持ち出して見せて呉れた。白を主色としたタツチの荒い絵であつたが、彼の説明を聞く迄もなく大変感心したものであつた。その後棟方志功の主催する青光画社展に何回か出品させて貰つた。展覧会の会場であつた青森館の二階や、赤十字青森支社の大広間などなつかしい記憶である。これ等の建物は戦災で一夜に灰燼と

化して今はない。この青光画社の会で、日本美術院彫刻部同人であつた古藤正雄、国画会会員の松木満史を知つた。棟方は裁判所の給仕の傍ら油絵を描き、古藤は菓子屋の職人でゴッホ張りの油絵を、松木は家業を手伝い乍ら油絵や彫刻をやっていたようである。皆若くて強烈であつた。彼等は私の中学卒業の前年相續いで上京している。中学生生活五カ年間油絵を描いていたお情けで一度も落第することもなく、ビリで卒業さして貰い、昭和二年卒業と共に上京して川端画学校でデッサンを勉強した。目白の親戚に居た関係もあつて、近所に居た自由美術の清水七太郎氏にデッサンを見て頂いた。九月に日本美術学校の洋画科に編入試験を受けて入学し、旺玄会の高野真美、行動美術の田中忠雄の両氏に技法を、教頭の荒城季夫氏に学科のお世話になつた。同期生に二科会の服部正一郎、一水会の三浦俊輔、日本画科に日展会員であつた吾妻碧宇、彫刻科に日展の円鏝勝二が居た。居所も目白から吉祥寺、高円寺と移つた。ここで又棟方、古藤、松木と再会し、やがてお互に負けずの競争の時代が始まるのである。日美在学中に、一九三〇年協会、白日会、光嵐会等に入選した。作風はフオービズムであつた。

貞二と新油絵展を結成し、資生堂画廊で二回作品展を開催した。作品はいずれも益々シュールレアリズムに進んでいた。二科不出品後、斉藤義重、山本敬輔、広幡憲、高橋迪章と絶体象派展を結成し、第一回展を日動画廊で開催した。昭和十四年独立美術を脱退した福沢一郎等の美術文化協会結成に斉藤義重、高橋迪章と参加し終戦迄続いたのである。美術文化時代の作風はシュールレアリズムの傾向から浪漫的に変わっていったのであつたが、絵画構成上の考え方は依然としてシュールレアリズム的であつたし、それが現在迄続いているのであるが、これは私にとつて制作上好都合なため、若くしてシュールレアリズムの傾向に進んだことは大変幸であつた。昭和二十年終戦と共に二科会が東郷青児の主催のもとに再結成され、その新会員に列して今日に到っているが、今後の課題は厚味のある写実を基調に東洋の浪漫的な幻想の世界に入るべき体制を整えたいと願っている次第である。



美術誌「美術ジャーナル」昭和三十七年七月号に掲載された「作家の記録 鷹山宇一」から転載。

流行が渦巻く東京で、若き画家は自らの方向性を探るために様々な試行錯誤をしたことであろう。結果、行き着いた先が「木版画」となったことは今日の鷹山を知る人には意外なことだろうが、さらにはこの木版画で「二科展」デビューを飾っているのであるから驚く。1930年、第17回二科展に「都会風景」「風景を配せる静物」という木版画2点が初入選をした。

版画家時代の鷹山を知る一人、東京の下宿先で一緒になり長く親交のあった福島県出身の版画家・斎藤清は「天才に出会ったかと思つた」とその才能を評した。また、鷹山のシユルレアリスム版画は実に手の込んだもので「刀とバレンで緻密な油絵を描き上げたと思われる作品であつた」とは、同郷青森の版画家・関野準一郎の言葉である。しかも満足が行く一枚しか残さない。「何枚も刷れる版画は芸術品として価値がない」と言う言つて版木は悉く割つてしまい、現存するものは皆無に等しい。生涯に制作した点数もはつきりとは分からないため幻の如くの「鷹山版画」となっている。

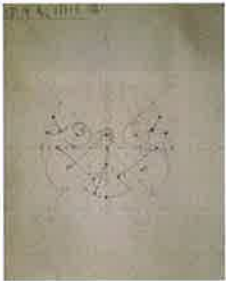
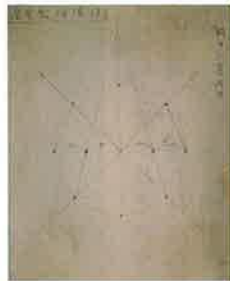
はじめたきつかけは単に「面白そうだった」から。しかし思うに、その面白い場面をつくつていたのは、板画家・棟方志功をはじめとする同郷の芸術仲間たちではなかつただろうか。

志功たちとの交流は、鷹山の旧制青森中学（現青森県立青森高等学校）時代にはじまる。青森市・合浦公園

に隣接する寄宿舎生活を送っていた鷹山は、時折公園へやつてきては写生をする異様な風態の若者の存在に気付く。キャンパスが彩られていくごとに着ている衣服も色とりどり、油絵の具でベタベタ。よく見ると、絵筆をとこまわず拭つていることにも気付かず一心不乱に描き続けている。その青年が、志功だつた。この出会いが主宰する「青光画社」を通じて、後に国画会会員となる松木満史、彫刻へと転向した古藤正雄ら青森の若き芸術家たちとの交流へと繋がつて行く。「青光画社」は19才の志功、16才の松木、と早熟な青年が審査をする公募展を開催したりと破天荒、豪放大胆な、しかし、当時の青森洋画界の先駆的な美術団体であり、その第2回展に鷹山も油絵を出品している。自由闊達な空気と仲間たちとの切磋琢磨のこの時代が「絵筆に生きた」鷹山の生涯を決定づけ、その後70余年にも及ぶ画業はここから始まった。彼らとの交流は鷹山が上京をした1927年からそれまで以上に深く濃密に続いて行く。特に面倒見の良い松木のアトリ

エはいつもみんなの溜まり場となり、志功に至つてはほとんど居候状態で、帝展落選を繰り返しながらも油絵を描き続けていたが、この頃には川上澄生に傾倒し本格的に版画を修行しようかという時であつた。松木はというと、すでに青森時代から木彫、油彩、木版と器用にこなし、すでに日本創作版画協会展へ入選を果たしている。そんな背景を踏まえると、版

■鷹山宇一のデザイン 【七戸町立七戸幼稚園の園章図案 1966 (s41) 年】



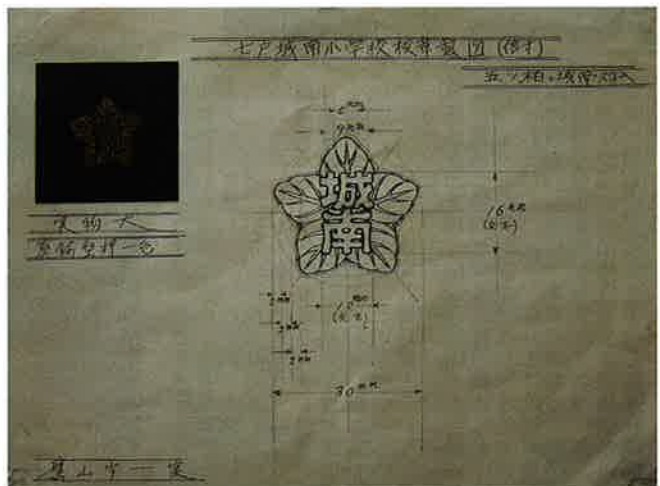
城南小学校「校章」 その考案理由について

—当時のPTA会長に宛てた書簡から—

1. 七戸町に縁のもの
2. 町民の皆さんが見て納得のいくもの
3. 嫌みのないもの

以上の想定のもとに、平凡なもの程親しみが湧くのではないかとの結論に達し、新形式のものは一切やめて図案した結果、五つ柏に城南の文字を配したものが出来上がりました。

【七戸町立城南小学校の校章図案 1963 (s38) 年】





▲「東奥展総会」。裏書きに昭和5年頃との記載がある。志功、満史はじめ青森を代表する画家たちの顔が見られる。記載されたそれぞれの作家名は鷹山自らが書き込んだものである。



▶鷹山宇一の「編み物をする女」(仮題)個人蔵
鷹山宇一木版処女作高円寺宮中にて1927年
12月絶版とある。

●後に独自の版画表現でシュルレアリスムを
追求した鷹山木版には見られない、女性像と
刷りの風合いとが相俟って優しい雰囲気漂う
作品である。1930年第17回二科展にシュ
ルレアリスム木版で入選するまでの3年間は、
油彩、木版、そしてフォーヴィスム、シュル
レアリスムと様々な試みがなされた時代であ
った。

画をやってみようか

・・・鷹山にその
ような気分が生まれ
るのもごく自然のこ
とと思われる。幸い
にも木版処女作は現
存していて、同期
の松木の木版画と相
通ずるところがある。
シュルレアリスム風
のそれとは異なり、
編み物をする女性像
をモチーフとした木
版らしい刷りの風合
いが味わい深い作品
である。上京をした
年の12月に制作され
ていて、この年から
1946年頃まで、
彼が木版制作に打ち込んだのであろう
ことを推察することができる。

木版画で試みた鷹山のシュルレア
リスムは、二科会の中でも特に新傾
向の作家により結成された「九室会」、
さらには超現実主義集団「美術文化
協会」へと活動の場を広げ、木版画
にとどまらずパステル、水彩などあ
らゆる材料を駆使してシュルレアリ
スムの試みがなされていく。しかし、
時代は戦争という暗い影に覆われて、
自由に創造される芸術は無論弾圧の
対象となった。1942年の美術文
化協会第3回展、新版画会第3回展
への出品を最後に鷹山の制作活動は
一時中断を余儀なくされる。

今日の鷹山の油彩画、夢幻的な作
風が表わされたのは戦後まもなくの

◀新婚時代の鷹山宇一と増子夫人
写真裏には、「昭和25年1月2日」の記載がある。
この年の1月16日、長女・ひばりが誕生した。



ことである。1945年、東郷青児
の呼びかけに応じいち早く再建をし
た二科会の会員として復帰し、これ
以降は二科展を主軸に活動を展開、
画風もそれまでのシュルレアリスム
とは一線を画す。またこの頃、「絵描
きでは飯が食えない」そう言つて長
く独身だった鷹山は武井増子と結婚
し、5年間のうちに3女に恵まれ私
生活でも大きな転機を迎えている。

鷹山宇一記念美術館長をつとめる
長女のひばりは、父・鷹山宇一につ
いて「私たちは父の日の作文に、炊
事、洗濯、掃除をする父の姿を書き、
家事は母親の仕事、と思ひ込んでい
た」と言い、「いつでも私たち3人の
娘を傍において仕事をしていた」と
振り返る。また、孫たちにも恵まれ
た晩年は「私が仕事の邪魔になるだ
ろう、と騒いでいる孫たちを外に連
れ出ししばらくして帰宅すると、父

は台所の食卓の椅子に座り一人ぼつ
んとしてテレビを見ておりました。
『静かすぎて絵が描けない』と言い、
誰か一人は家に残るよう命じました』
と追想する。鷹山のロマンティック
な作品の背景には愛してやまない家
族たちの存在があり、あたたかな家
庭から叙情的作品が生み出されて
いる。

半世紀以上にも及ぶその生涯のほ
んどを家族とともに、鷹山は東京
に生きた。しかし、世に送り出され
た数多の作品たち、洗練されたモダ
ンで都会的な作品たちに、「ふるさと」
の痕跡が留められていることを見逃
すわけにはいかない。その底流には
「郷愁」という詩が静かに流れている。



▶「朝明けの歌」(油彩)1965年・個人蔵

●あと少しで地平線に太陽が現れる頃、都会
の建物がシルエットとなって浮かび上がる。
手前にとどしりと描かれた壺は滋味のある趣
をもつて、あたかもここから蝶たちが現れ出
たかのように、いまだ明けきれぬ街へと舞っ
て行く。前景と後景との間に横たわる暗闇の
空間はこれらを巧みに結びつけ、そこにどん
な世界が広がっているのか、どんな物語が繰
り広げられているのか、見る者の想像を掻き
立てる。鷹山宇一の幻想世界は内なる心の世
界へと誘う。

鷹山が生まれ育った七戸町は、青森県の中央を貫く八甲田連峰を西に太平洋を東に位置する。緑深き自然豊かな、古くから良馬の産地としても名を成した城下町で、長くこの地域の政治・経済・文化の中心として栄えた。1908年、七戸藩士にして御役医、維新後も士族、地主という家柄であった鷹山家待望の嫡男として誕生した宇一を、祖母・すまは「かまどの灰までお前のものだ」こう言って溺愛したといい、愛情に満ち恵まれた環境のなか幼少期を過ごす。また、七戸尋常小学校時代には代用教員として在任していた歌人・青山哀囚の薫陶を受け、特に、彼がわざわざ東京から取り寄せ子どもたちに与えた児童文芸雑誌『赤い鳥』は、鷹山少年の絵心に火をつけた。大正の自由主義を謳歌した『赤い鳥』は、長い歴史を誇る町特有の封建的な社会にあつては尚更のこと、文化的かつ革新的である。中でも、初山滋



▶幼い頃の鷹山宇一(中央と祖母・すま(左) | 写真提供/盛田旅館 |

のロマンティックで空想的な装画に鷹山は魅せられたといい、この出会いが、絵の道に進ませた一つのきっかけであったことを、後年率直に語っている。

幼少期の多感な時代に受けた「影響」をあなどることはできない。それどころか、子どもの感性が風土の中で培われるものであることを、鷹山の作品が証明している。今、彼のふるさと・七戸に建つ美術館でその作品と対峙したとき、確かに原風景がこの地にあることに気付く。移ろい行く季節と共に深みを増す草・木、森・山の「緑」、清涼感あふれる澄み渡った空気や山里の少年が初めて出会った煌めく海の「青」、そのモチーフやメインをなす色たちは、まさしく「ふるさと」そのものではないか。繊細な少年時代を過ごしたふるさとの記憶は、彼の核心部分に確かに根付いている。

◀「郷愁都市」(油彩 1998年・個人蔵)
●1998年春季二科展出品作。同年の、鷹山宇一記念美術館特別展「春季二科青森展」開催式に出席した当時の二科会理事長・鶴岡義雄氏(故人)は、90才を迎えようとしている熟練画家の作風の変化に、驚きとともに敬意の念を表した。長年築き上げた画風を壊すということは、一定の評価を受けた画家ならば尚更、難しいことではないか。「新しい価値の創造に向かつて」と二科会趣旨に謳われる精神を、まさに鷹山自らが体現しているかのような作品である。



「郷愁都市」という作品がある。二科展最後の出品作となつた亡くなる1年前の作品である。「郷愁」と「都市」とは一見すると対立するもののように思われるが、その両極に生きた鷹山ならではの発想の所作と言えるのかもしれない。また、彼は自らの最期が近いことを予感していたのではなからうか。東京の夜景を思わせる風景を背景に、前景にはシヤボン玉のような球体が無数に描かれている。それらの中に、彼のこれまでを懐古するような家族との思い出や好んで描いたモチーフなどが浮かび上がり、まるで天へ昇華するかの如く浮遊している。これら一つ一つを、蝶たちが静かに誘う。前景と後景との間に横たわる山と谷底を思わせる漆黒のシルエット。その絶妙な「空間」は、いくつもの山と谷を経て繋がっている。「大都会・東京」と「ふるさと・七戸」そして「現在」と「過去」、これらを巧に結



▲再現された「鷹山宇一のトリイ」。毎年12月10日の生誕記念日にあわせ冬の常設展で紹介している。

*本文は、記事掲載利用許可を得て、東北電力株式会社広報・地域交流部発行の「白い国の詩」平成18年夏号より転載いたしました。

静謐のレゾン・デートル

二科会と鷹山宇一

美術評論家土方定一氏により「現代日本の稀有な幻想画家」と評された鷹山宇一の画業を、『鷹山宇一画集』から二科展(春季二科展を含む。)出品作を中心に選択し、年代順に編集致しました。



都会風景 木版
1930 第17回二科展
二科展初入選作



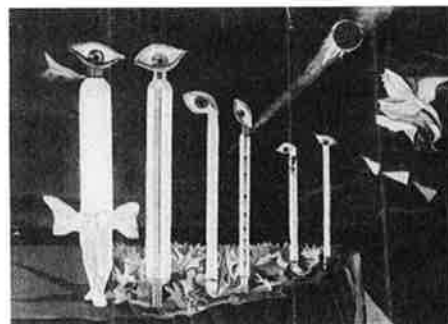
題不詳 木版
1931 第18回二科展



生マレ出ズ 木版
1933 第20回二科展



地ヲ離レザル花 木版
1933 第20回二科展



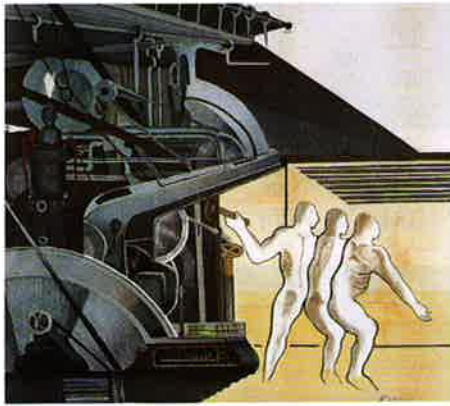
群 木版
1937 第24回二科展



若き花 木版
1941 デッサン社主催展



行く花 パステル
1942 芸術文化協会第三回展



失題 木版
1946 第31回二科展



めざめ キャンバス・油彩
1947 第32回二科展



少年の日の佛陀
キャンバス・油彩
1947 第32回二科展



山のかなたに
キャンバス・油彩
1948 第33回二科展



荒野の歌
キャンバス・油彩
1950 第35回二科展
会員努力賞

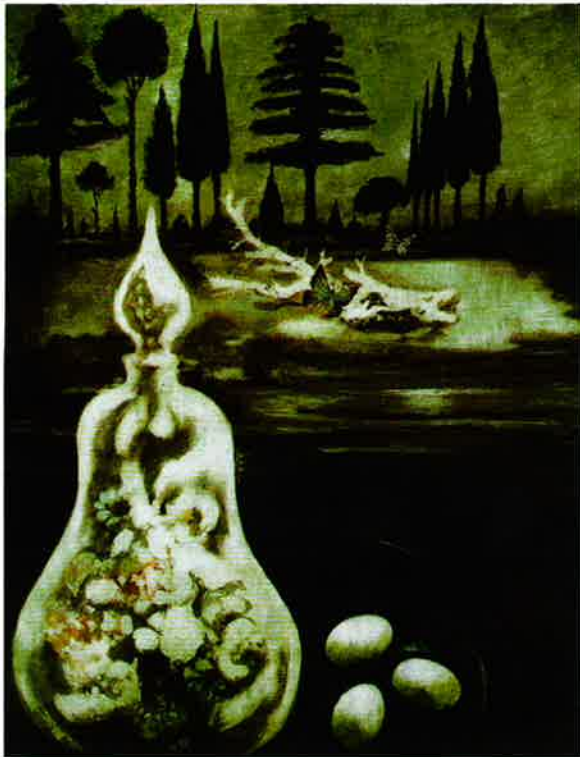
神奈川近代美術館買上



追憶
キャンバス・油彩
1950 第35回二科展
会員努力賞



静物
キャンバス・油彩
1952 第37回二科展



静物・開墾地
キャンバス・油彩
1952 第37回二科展



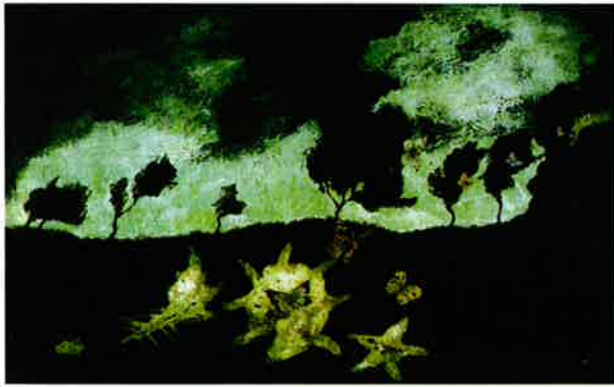
平原
キャンバス・油彩
1953 第38回二科展



緑園静物
キャンバス・油彩
1953 第38回二科展



トルソ
キャンバス・油彩
1954 第39回二科展



風

キャンバス・油彩
1954 春季二科展



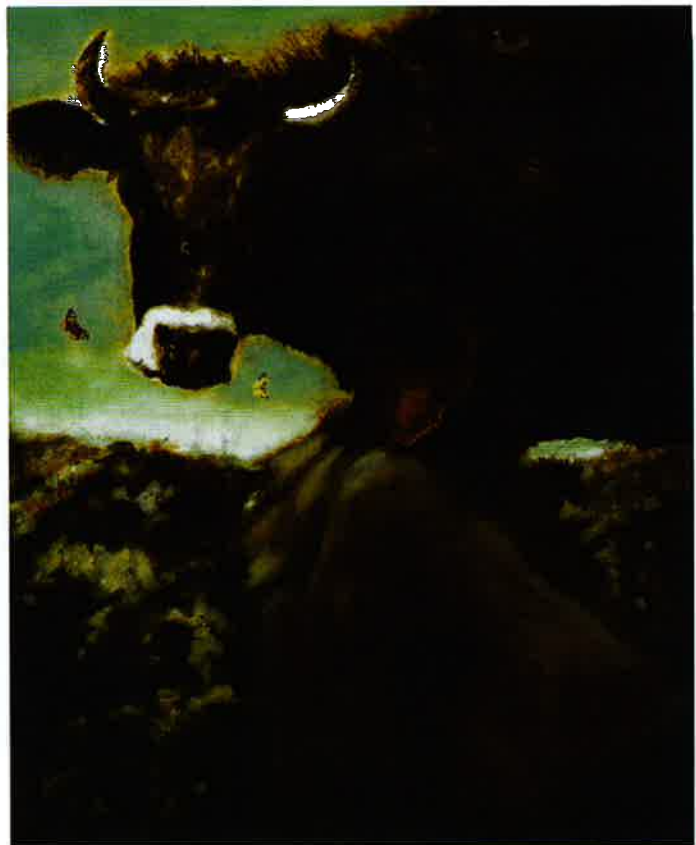
ふるさとの歌

キャンバス・油彩
1955 第40回二科展



黒髪

キャンバス・油彩
1956 春季二科展



牧歌

キャンバス・油彩
1958 第43回二科展



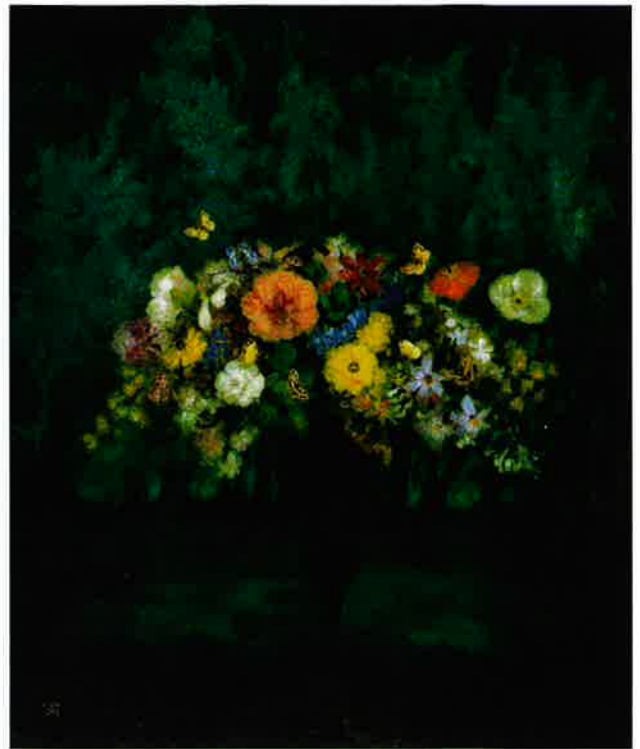
遊蝶・花
キャンバス・油彩
1962 第47回二科展



あざみの野
キャンバ・油彩
1963 第48回二科展



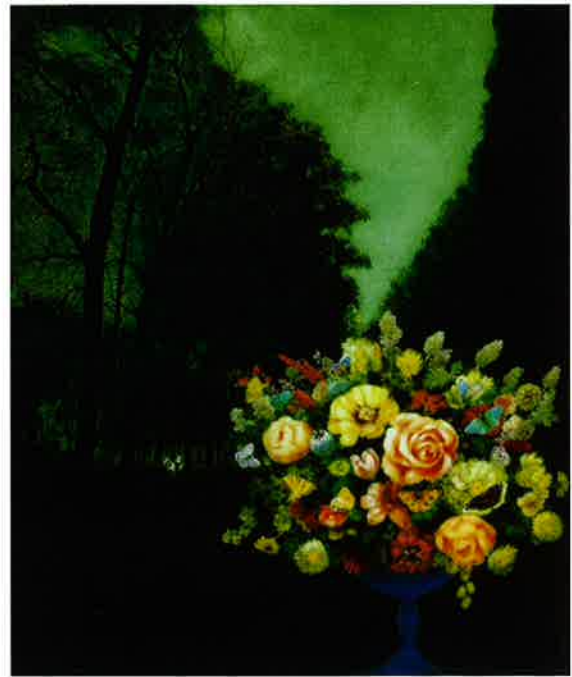
朝明けの歌
キャンバス・油彩
1965 二科50周年記念回顧展



森と花
キャンバス・油彩
1966 第51回二科展
青児賞受賞



緑陰の花
キャンバス・油彩
1971 第56回二科展



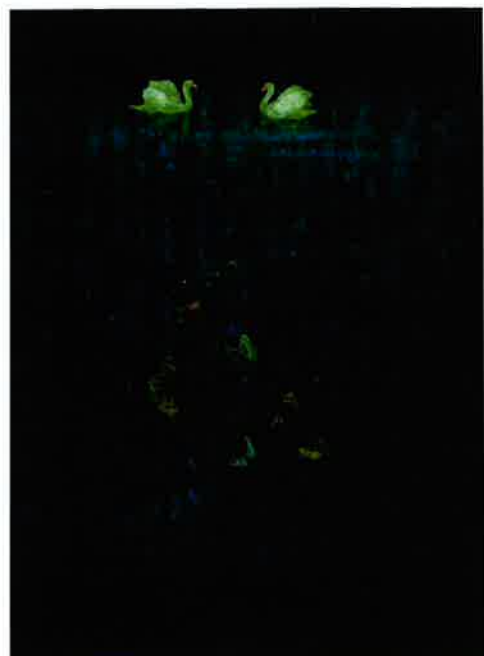
森の花
キャンバス・油彩
1973 第58回二科展



沼
キャンバス・油彩
1974 第59回二科展



波濤の海
キャンバス・油彩
1978 第63回二科展



流紋
キャンバス・油彩
1979 第64回二科展



海濱の花
キャンバス・油彩
1980 第65回二科展



湖畔の花
キャンバス・油彩
1982 第67回二科展



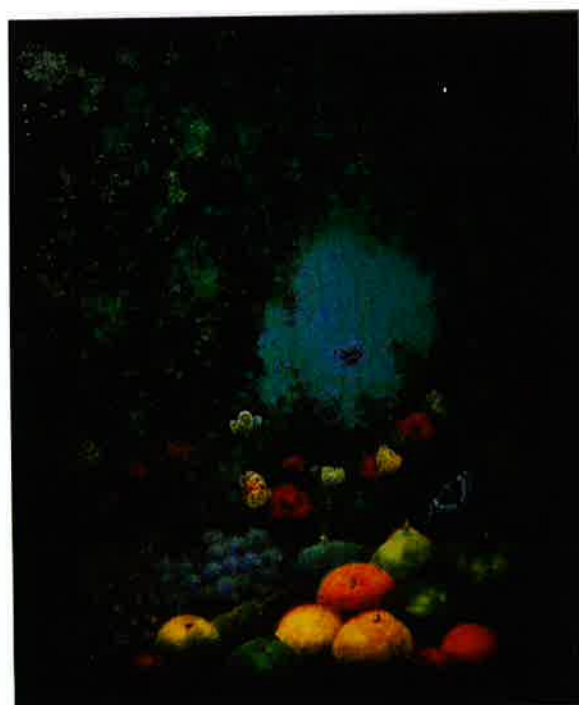
蒼原の季節
キャンバス・油彩
1985 第70回二科展



港の花
キャンバス・油彩
1986 第71回二科展



高原ノ静物
キャンバス・油彩
1987 第72回二科展



緑陰の静物
キャンバス・油彩
1988 春季二科展



海浜の静物
キャンバス・油彩
1985 第73回二科展



船渠の花
キャンバス・油彩
1989 第74回二科展



早春賦
キャンバス・油彩
1990 春季二科展



夜明けの静物
キャンバス・油彩
1990 第75回二科展



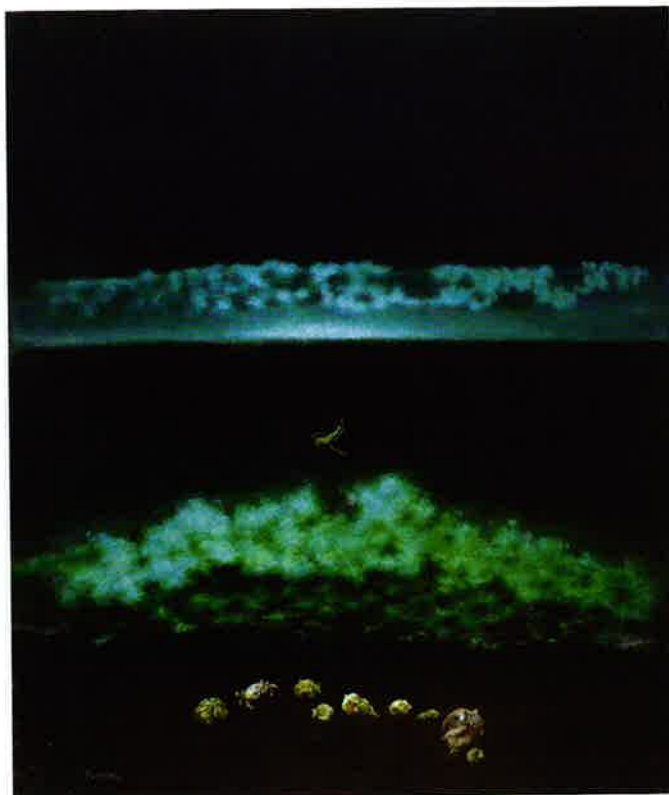
高原の静物
キャンバス・油彩
1991 第76回二科展



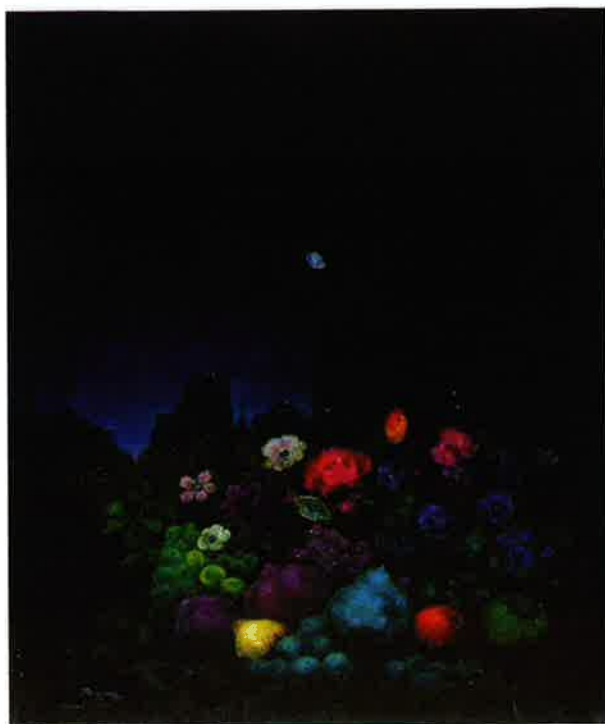
湖畔の花
キャンバス・油彩
1992 春季二科展



緑園の静物
キャンバス・油彩
1992 第77回二科展



小さな世界
キャンバス・油彩
1993 春季二科展



黎明の静物
キャンバス・油彩
1994 春季二科展



明けゆく森の花
キャンバス・油彩
1995 春季二科展



縹渺夢幻
キャンバス・油彩
1995 第80回二科展



陽炎の季節
キャンバス・油彩
1996 春季二科展



古城幻影
キャンバス・油彩
1997 春季二科展



郷愁都市
キャンバス・油彩
1998 春季二科展
最後の二科展出品作



鷹山宇一先生記念「遊蝶記」

1999年10月25日、90年の天寿を全うし、鷹山宇一先生は永眠されました。「遊蝶記」は、花と蝶を描く画家として知られる先生の作品に度々登場する作品名「遊蝶・花」、そして、「記憶」「記録」「記述」のように、憶えておく、書き記しておく、との意味合いを込めて命名されたもので、生前、愛する家族と共に過ごすお誕生日をとっても楽しみにしていたという鷹山先生にちなんで、「逝去された翌年の誕生日12月10日には、しまり、



鷹山宇一先生 生誕一〇〇年

毎年この日にあわせ開催しています。

例年、広く多くの方々に鷹山作品に親しんでいたことが、当日は終日無料開館するほか、友の会会員をはじめとする関係各位にお集まりいただき、「遊蝶記の集い」を行っています。鷹山先生を偲ぶとともに、この一年を振り返り、そして、新年へ向けての抱負を新たにすることとして活用いただけただけなら幸いです。

一〇〇回目のお誕生日を迎えた今年には、鷹山先生とご親交のあった方々からエピソードが披露されたり、また、来年1月1日付で青森県立美術館長に就任することとなった、鷹山ひばり館長へのお祝いと激励の言葉も多数寄せられるなど、鷹山先生も格別にお喜びのお誕生日になったのではないのでしょうか。

鷹山ひばり館長の青森県立美術館長就任にあたり、財団法人鷹山宇一記念美術振興会理事・戸籍昭吉氏が当美術館長を代行することとなりました。

新年もどうぞよろしくお願ひ申し上げます。



▲正午12時から行われた「遊蝶記の集い」には、友の会会員をはじめとする関係各位20名がお集まりくださいました。ロウソクの炎が揺れるケーキを手に、皆でハッピーバースデーの歌をうたい、鷹山宇一先生100回目のお誕生日を祝いました。



 2008年、鷹山宇一先生の生誕一〇〇周年を迎え、4月から当館はもとより町をあげての記念事業が盛り沢山で行われました。慌ただしく日々過ぎていくうちに、気がつけばもう12月10日。鷹山先生のお誕生日当日となり、ありきたりの言葉ながら一年の何と短いことか、そして、時間の過ぎゆくその早さには、まったく、驚嘆させられました。一昨年去された翌年からはじまった恒例の「遊蝶記」も、今年9回目。お天気に恵まれ、穏やかな一日となったこの日、窓の外を眺めながら「遊蝶記」も、鷹山先生が生を受けた百年前の12月10日は果たしてどんな一日だったのだろうか...と、思いを巡らせました。

ここでは、「遊蝶記の集い」をはじめ、本年の生誕一〇〇周年に関連した諸事業を、今一度振り返りご紹介したいと思います。

鷹山宇一 百寿の祝い

鷹山先生の100才を祝して、12月13日、杉屋敷奥山において、当財団役員をはじめ関係各位にお集まりいただき、「鷹山宇一 百寿の祝い」を開催しました。



▲青山浄晃当財団理事長挨拶の後、来賓を代表して七戸町長・福土孝衛様、七戸町議会議長・田中正樹様よりご祝辞を頂戴しました。また、鷹山家を代表して鷹山ひばり館長より御礼の言葉が述べられたほか、美術館建設と運営に尽力された福土孝衛町長へ感謝状と花束が贈呈されました。

鷹山宇一 生誕100周年 関連事業を振り返って

鷹山宇一 生誕100周年 記念事業実行委員会設立

七戸町が計画した鷹山作品の購入等、生誕100周年記念事業に協力するための募金活動が行われ、4月24日には、善意の募金より100万円を町へ寄付しました。この100万円と、町美術資料等取得基金により、七戸町は鷹山宇一の油彩画2点を購入、8月1日初披露されました。



▲4/24七戸町役場町長室において、実行委員会・青山浄晃会長(左)から七戸町福土孝衛町長(右)へ100万円が手渡されました。

鷹山宇一 生誕100周年 記念展を開催しました

七戸町と当財団との主催により、「宇一が愛した西洋ランプ／故郷(しちのへ)に帰った作品たち」今、いつとときの、預かりもの」と題して特別展を開催しました。鷹山コレクションから本展初公開となる装飾卓上ランプをはじめ、鷹山作品を前期・後期と入れ替えをして、4月27日～8月31日まで展覧しました。



▲青森県立美術館をはじめ、県内の公機関や個人から作品を借用し、常設展ではなかなか鑑賞いただけない作品を展示しました。

購入された鷹山絵画のご紹介



▲①「山のかなたに」(1948年、キャンバス・油彩)と
②「夜明けの静物」(1990年、キャンバス・油彩)

永井龍之介先生 をお招きし美術講演会を開催！



6月16日、人気のTV番組「開運！なんでも鑑定団」でお馴染みの鑑定士で、東京銀座・永井画廊代表取締役社長の永井龍之介先生を講師にお招きし、「絵画よもやま話」と題した講演会を開催しました。

購入絵画の「お披露目式」が 開館記念日に行われました

町主催によるお披露目式は、8月1日、開館記念日にあわせ美術館において行われました。関係各位が見守る中、七戸町の未来を担う子どもたちを代表して、美術館ワークショップに参加の、町立城南小学校6年酒井陽君、同じく後沢和夏さんに「ご協力いただき除幕を行い、購入作品初披露となりました。」



▲鷹山宇一 生誕100周年記念展において特別展示の再現された「鷹山宇一のアトリエ」横に、購入された絵画2点を展示しました。

絵画購入資金 募金終了のご案内

鷹山宇一 生誕100周年の記念すべき年を迎え、鷹山作品の取得を目指してお願いをいたしました募金活動は、12月末日をもって終了させていただきます。ご協力誠に有り難うございました。

●○○○○●○○
美術館の
ワークショップ
から
○○●○○●○○●○○●

ウッド カッターズ クラブ
WOOD CUTTERS CLUB
美術館あ〜っと!くらぶ



その後、型紙をつかって模様を写し取る「ステンシル」という技法を使っています。先端がスポンジになっている道具を使い、トントンと上から優しくたたいて色

WOOD CUTTERS CLUBS
木こりの工房からは、10月19日に行なった「手鏡づくり」の様子をご紹介します。
この活動は、勤労感謝の日に、いつもお世話になっている人に手鏡をプレゼントしよう企画しました。まずは、トルベイントの基本的な手順を踏んで地塗りまで行います。



指導ありがとうございます。
完成した年賀状は力作揃い！藤谷先生、ご

をのせていきます。絵の具の量が多すぎても、少なすぎてもいけません。適度に新聞紙の上などでたたいて落ち着かせてから色をのせます。根気よく何度も優しくたたくことが、きれいに色をのせるコツとなります。素敵な手鏡が完成しました。

美術館あ〜っと!くらぶからは11月8日、28日に行った「年賀状版画をつくる」の様子をご紹介します。
これまでゴム版画、彫り進み版画と勉強してきたことを活かし、今年最後の版画教室では、それぞれが作りたい年賀状制作に取り組みました。1色、3色を使い、色ごとに版をかけた多色刷木版画に挑戦です。来年の干支は「丑」。同じ題材でも一人一人まるで違う表現なのが何ともおもしろいですね!! 刷る際には、家でも作業ができるよう水彩絵の具に「大和のり」を混ぜて粘り気を出し、インクとして使いました。3色使う人は、一枚につき、3回の刷りを行わなければなりません。心を込めて作業を続けることが大切です。手作りのお手紙で嬉しいですね。完成した年賀状は力作揃い！藤谷先生、ご



子どもたちの 絵画展!!

第8回鷹山賞児童作品展
第8回地球環境世界児童画コンテスト優秀作品展
11月25日(日)まで



▶10/2、審査会にて。審査員長・濱田進先生

七戸町教育委員会と共に主催して、青森県南部地方の小中学生に公募した絵画コンテスト「鷹山賞児童作品展」その第8回展となる本年は、50団体1個人から937点もの力作が寄せられました。10月2日に開催した審査会では、鷹山賞を頂点とする入賞30点、入選99点が出され、11月15日には、栄えある入賞者を讃え、授賞式と記念パーティーが行われました。

只今美術館において、その入賞入選作品全129点と、併せて、日本品質保証機構が主催する世界各国の子どもたちに公募した絵画コンテスト「第8回地球環境世界児童画コンテスト優秀作品展」から、地元青森県より審査員特別賞に選ばれた川口侑華さん(東北町)の作品を含む70点を展覧しています。

お正月休み、冬休みを、ご利用いただき、是非ご家族みなさまで、この子どもたちによる絵画展をご鑑賞ください!

▼11/15授賞式にて、鷹山賞を受賞した丸山朋実さんと、高館唯華さん



【第8回鷹山賞児童作品展 鷹山賞受賞作品】
⑤小学生の部「わっ、すごいかお」(水彩、丸山)
高館唯華さん(八戸市立白銀南小学校1年)
⑥中学生の部「Lily(リリー)」(水彩)
丸山朋実さん(十和田市立三本木中学校3年)

Information

- 入館時間●
10:00~16:30 (閉館は17:00)
- 休館日●
毎週月曜日
年末年始(12/29~1/2)
- 入館料●
一般/500 (400) 円
学生/300 (240) 円
小中学生/100 (80) 円
※()内は20名様以上の団体、
県民カレッジ受講者、JAF会員割引料金
※友の会会員の皆様は特典とおり
ご入館いただけます
- 展示替え・館内整備臨時休館●
1月26日(月)~2月6日(金)

● 美術館日誌 ●

【9月】

- ▼1日/町内老健施設無料招待日。展示替えのため臨時休館(12日迄)
- ▼2日/鷹山館長東京都出張(永井画廊グランドオープン、3日迄)
- ▼4日/鷹山館長八戸市、大池八戸市青森市出張鷹山宇一誕生一〇〇周年記念展借用作品返却のため。鷹山館長県立八戸水産高校にて講演
- ▼5日/鷹山館長十和田市出張(多田瓊林展開催式出席)。大池青森市出張鷹山宇一誕生一〇〇周年記念展借用作品返却のため。美術館電気設備定期点検(佐藤電気)
- ▼7日/大池東京都出張(日本画名品展「ヤマタネ所蔵作品借用立会、8日迄)
- ▼9日/日本画名品展作品搬入(東京マルイ美術)。日本画名品展開催式打合せのため、青森放送株(営業)局長、蒔苗様、RABサービス社長、加藤様、同田中様。青森放送日本画名品展搬入・展示作業を取材
- ▼10日/鷹山館長青森市出張。町役場新幹線建設対策課2F工房使用(県立七戸高校土地区画整備課外授業のため)
- ▼11日/(株)ヤマタネ文化事業部長・関勝美様ご来館。青森放送TV番組「あつと@なまてれ」日本画名品展開催について鷹山館長を取材
- ▼12日/日本画名品展開催式・テープカット・レセプションパーティー開催。青森放送TV番組「ニュースリーダー」日本画名品展を取材
- ▼13日/日本画名品展初日(10/13迄)。(株)ヤマタネ閣様によるギャラリートーク開催
- ▼15日/友の会研修旅行開催(岩手県立美術館モディリアーニ展)
- ▼16日/一〇〇回目となる火曜サロン開催。青森放送株常務取締役・長崎昭義様をお招きし記念講話会を開催。青森放送

TV番組「あつと@なまてれ」日本画名品展を取材

▼17日/八戸市老人クラブ「一行様」ご来館。町立城南小学校5年生児童45名・引率教員2名様、同4年生児童36名・引率教員2名様ご来館

▼20日/弘前市若竹の会18名様ご来館。美術館あつとくらぶ「多色刷り木版②」開催

▼24日/青森県立美術館事務局長・佐藤様、森田様ご来館。町立城南小学校6年生児童46名、引率教員3名様ご来館

▼28日/岩手県・石神の丘美術館友の会24名様、秋田県・小坂町総合博物館郷土館「友の会」26名様ご来館

【10月】

▼1日/町立城南小学校3年生児童46名、引率教員2名様ご来館

▼2日/第8回鷹山賞児童作品展審査会開催。審査員長・濱田進先生来(7/3日迄)

▼5日/中世の館「ふるさと歴史散歩」21名様ご来館

▼9日/町立七戸小学校6年生児童51名・引率教員2名様郷土学習のため来館。NHK文化センター弘前支社20名様ご来館

▼11日/八戸市口ターリクラブ18名様ご来館

▼13日/(株)ヤマタネ閣様ご来館。ギャラリートークを開催。日本画名品展最終日

▼14日/町内老健施設無料招待日。展示替えのため臨時休館(24日迄)

▼15日/日本画名品展作品搬出(東京マルイ美術)

▼16日/結のまちアート実行委員会に古屋敷 佐伯出席2F工房に於いて

▼18日/鷹山館長弘前市出張(弘前市博物館「三國恭三父子展」ほか、19日迄)

▼19日/ウッド・カッターズクラブ「手鏡づくり」開催

▼20日/佐伯青森市出張。「県民のための

美術館づくり懇話会」出席

▼23日/鷹山館長青森市出張(絵本コンペ)。美術館電気設備定期点検(佐藤電気)

▼24日/鷹山館長、大池三沢市出張(青い森鉄道全線開業イベント打合せ)。自動ドア定期点検(子ブコ)。冷暖房切替作業(オキタ工業)

▼25日/第68回国際写真サロン展、第6回女性写真公募展(11/9迄)。七彩会油絵教室開催。青森県副知事蝦名武様ご来館

▼26日/全日本写真連盟青森支部主催、写真教室・モデル撮影会開催

▼27日/鷹山館長、大池階上町出張。坪青森市出張(公益法人説明会)

▼28日/尾上退職教職員の会14名様、北秋田市芸術文化協会39名様ご来館

▼29日/鷹山館長青森市出張(私立学校審議会)

▼30日/上川目老人クラブ21名様ご来館。美術館ワークショップを体験

▼31日/鷹山館長青森市出張。青森県副知事蝦名武様ご来館。三既日赤奉仕団30名様ご来館

【11月】

▼1日/七戸町産業文化健康まつりへ子どもたちのワークショップ作品を出品(2日迄)

▼4日/鷹山館長青森出張(鷹山賞副賞引取、生涯学習審議会出席、5日迄)

▼8日/青森県日通日友会23名様ご来館。美術館あつとくらぶ「年賀状版画①」開催

▼9日/第68回国際写真サロン展、第6回女性写真公募展最終日。フォトしちのへの協力により作品搬去。写真サロン作品発送

▼10日/鷹山館長七戸町まちづくり会議に出席(七戸庁舎。美術館電気設備定期点検(佐藤電気)。当財団第4回理事会開催)

▼11日/展示替えのため臨時休館(15日迄)

▼12日/(財)地域創造より公立美術館の在り方について調査のため来館。青森県立美術館事務局長・佐藤様ご来館

▼15日/鷹山賞児童作品展入賞者授賞式。記念パーティー開催

▼16日/七彩会油絵教室開催

▼17日/鷹山館長、大池青森市出張(日本画名品展御礼)

▼18日/七戸町まちづくりの会主催「いいとこ発見」プロジェクトへ坪参加(19日迄)。参加の21名様美術館を見学。鷹山館長概要説明

▼20日/町立七戸小学校3年生児童37名・引率教員4名様。同4年生児童60名・引率教員4名様ご来館。平成20年度上社連社会教育委員研修会美術館を見学。鷹山館長概要説明

▼21日/町立城北保育園園児13名・引率保育士3名様、町立城南小学校3年生児童46名・引率教員2名様。同2年生児童44名・引率教員3名様ご来館

▼22日/七彩会油絵教室開催。鷹山館長、佐伯十和田市出張(アートサークル彩展鑑賞)

▼23日/ウッド・カッターズクラブ「ペーパークイリング」開催

▼26日/町立城南小学校6年生児童46名・引率教員2名様ご来館。青森県立美術館角様、森田様ご来館。デリー東北新聞社七戸支局長・橋場様ご来館(鷹山館長を取材)

▼28日/鷹山館長青森市・平川市出張(男女の仕事と生活の調和フォーラム・パネルディスカッション、平川市民文化祭にて講演、29日迄)。佐伯、新幹線七戸駅開業実行委員会観光部会に出席(七戸庁舎)

▼29日/美術館あつとくらぶ「年賀状版画②」開催

▼30日/十和田市立法奥小学校教諭野坂様ご来館。来年度の連携事業等打合せ

● 美術館年末年始休館のお知らせ ●

12月29日(月)～1月2日(木)休館

新年早朝「あつとくらぶ」再開(1月3日)

鷹山宇一年譜

- 1908年(明治41) 12月10日、父鷹山胤三、母ふじ乃の長男として青森県七戸町に生まれる。
- 1915年(大正4) 7歳 七戸尋常高等小学校入学。
4年生時、代用教員として赴任した歌人青山哀囚の文学的薫陶を受け、芸術への関心が高まる。
- 1921年(大正10) 13歳 同高等科へ1年間通学。
- 1922年(大正11) 14歳 旧制青森中学校(現在の青森県立青森高等学校)入学。
この頃、棟方志功と出会う。
- 1923年(大正12) 15歳 棟方志功、松木満史らの青光画社に加わり、絵の制作を開始。

—青光画社— 大正11年に当時19歳の棟方志功と16歳の松木満史が中心になって組織された美術集団であり、青森県では、初めての公募展を開催するなど、その活動は、青森県洋画界に先駆的な役割を果たしたと高く評価されている。
【青光社の五人展(青森市・青森市教育委員会主催)解説文より】



幼児期の鷹山宇一
(七戸町 盛田旅館蔵)



旧制青森中学校時代(中央)

「そのころ青森県出身の画家で下澤木鉢郎(国画会々員)という先輩がいました。中央美術や光風会の常連でありましたが、東京からたまたま青森に帰ってくるその姿が、パリの画家を見るようにスマートであったのです。黒い髪を首の付け根まで伸ばして、真っ黒なつばの広い帽子をかぶって、吊り鐘マントをふわりときて、首すじに一本ショールを巻いて、その端を背中に長く垂らしている恰好はすばらしい魅力でした。はやく一本立ちの絵描きになって、あの人のような恰好になりたい。なりたくないあ、とねがったものでした。あのようになれば、死んでもよいと思ったものでした。それにしても、絵にあこがれ、彫刻にあこがれてやまぬ若ものたちのグループをつくる必要があったのでした。そして、松木、鷹山、古藤、それにわたくし(棟方)とで、「青光社」という洋画のグループをつくることになりました。その第一回展覧会を日本赤十字社青森支部でひらくことになりました。」

【棟方志功「板極道」】

- 1927年(昭和2) 19歳 旧制青森中学卒業と同時に上京、川端画学校に入学しデッサンを学ぶ。
9月、日本美術学校洋画科へ編入。
- 1930年(昭和5) 22歳 日本美術学校卒業。
第17回二科展で初入選。「都会風景」「風景を配せる静物」(共に木版) 東京府美術館 9/4-10/4以後、1937年まで毎年出品。



都会風景(木版)



第17回二科展画集



旧制青森中学校30周年記念メダル

- 1931年(昭和6) 23歳 旧制青森中学校30周年記念メダル図案作成。
第18回二科展で4点入選。「ラ・リュヌ・サンボルエ」「街ノ上」「風景を配せる静物」「風景と鳥」
東京府美術館 9/4-10/4

……しかしそのフォープの後退を埋めるように二科モダニズムが抬頭する。超現実主義、ピュリズムやメカニズムの抽象主義、甘美で軽い調子の立体主義等がそれで、昭和六年度二科展の時、がらんと広い第九室にその諸派がすべて集められ、壁面にずらり並んで、その部屋はモダン・ルームと称され、二科の呼びものとなった。そして描き手の古賀春江、東郷青児、阿部金剛、中村顕太郎、高井貞二、高田力蔵、米倉寿仁、鷹山宇一(版画)、佐野繁次郎、石丸一らは、その時分の風俗現象の一つ「モ・ボ」にちなんで、モダンボーイなどと言われた。……

【二科70年史1914-1943 P145 作品の傾向と制度改正】

……鷹山宇一くんの滋味ある色調の木版画四点は寧ろ表現派風な装飾的構図である。

【美術新論6-10 11月号モダニズムの部屋 仲田定之助評】

日本版画協会展へ出品。

1932年(昭和 7)24歳

第19回二科展で3点入選。
「清教徒の逃避」「オリンピヤ」「美しき天文学者の錯誤」東京府美術館 9/3-10/4
12月、巴里東京新興美術展に版画を出品。

1933年(昭和 8)25歳

第20回二科展に出品。「生レ出ヅ」「地ヲ離レザル花」東京府美術館
日本版画展示会に現代部代表作家として出品。
青森県地方紙「上北新聞」に木版による挿絵が佐藤米次郎氏と共に掲載される。
「七戸風景その一 見下ろせる町」「七戸風景その三 七戸橋」「七戸風景その五 膝森東屋」「奥入瀬溪流」
二科会の若手前衛作家である高井貞二、伊藤久三郎、井上覚造、山口長男、佐伯米子、島崎鷄二、佐野繁二郎、保岡とよ子、昇須美子、彫刻家の荻島安二、そして建築家の保岡勝と「新油絵」を創立。



昭和5年頃 東奥展総会(前列右から3人目) 棟方志功、松木満史、鳶谷龍岬、鳥谷幡山らと

新油絵第1回展に出品。「アトランティード」「静かなる祭典」「移転の程」「月の形象」
「ラ・リュヌ・サンボルエ」資生堂 6/7-11



盛田牧場にて(左端)

鷹山宇一氏は版画家だ。色彩の好みの洪さ、構図の新鮮さ、技術のうまさ、これはめざましい版画家だ。「月光の墓碑」の上部に浮かんだ雲の美しさには不思議なものがある。「海の記念碑」も面白い。

【セルパン7月号 新油絵展】

鷹山宇一君は二、三年前から同じやうな仕事を続けてゐる。この密な絵が版画であることは、一面それが工芸化してゐると言ふ非難を受ける。然しこの作家の持っているシュールレアリスティックな眼は注目すべきである。日本的で而もかなり面白い見方をするとところは、この作家の特色である。人は非難し攻撃するかも知れない。然しこれを追求し継続して、独自の画境を開かれることを祈る。今度の作品の中では「移転の程」が最も良いと思ふ。「ラ・リュヌ・サンボルエ」も悪くないが、幾分公式的になってゐるのは惜しい。

【洋画研究4 外山卯三郎評 1933年8月】

1934年(昭和 9)26歳

新油絵第2回展を開催。銀座・資生堂 3/24-28
第21回二科展に出品。「崩壊史」東京府美術館 9/3-10/4
デッサン社主催展に出品。「若き花」(木版)

……棟方の影響から版画制作をはじめて複雑な多版表現でシュールレアリスム版画を追求した鷹山宇一、恩地の主宰する「一木会」に参加していた東京美術学校系統のグループ「貌」会員の加藤太郎や杉原正巳、「造形版画協会」の柴秀夫らの版画家たちが、木版画を中心として、その独特の版表現を駆使して、幻想的な作品を制作したのである。
【「日本のシュールレアリスム」(名古屋市美術館)図録 幻想の版画家たち】

1935年(昭和10)27歳

第22回二科展に出品。「長恨衣」東京府美術館 9/3-10/4
黒色洋画展に出品。(以後、3年間に15回の展覧会を開催し、ほぼ毎回出品)銀座・近代画廊 3/26-30

1936年(昭和11)28歳

第23回二科展に出品。「大陸の祭典」東京府美術館 9/3-10/4

1937年(昭和12)29歳

第24回二科展に出品。「群」東京府美術館 9/2-10/4
第1回二科会十二人展に出品。新宿・天城画廊12/12-17
出品作家：服部正一郎、橋本徹郎、浜田浜雄、山本直武、野原隆平、山本敬輔、金煥基、林鶴雄、斎藤義重、鷹山宇一、高井貞二、高橋迪章、丹下富士夫

1938年(昭和13)30歳

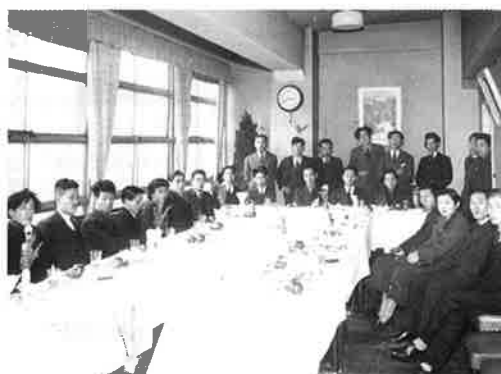
二科展出品の広幡憲、斎藤義重、高橋迪章、鷹山宇一、山本敬輔の5名により「絶対対象派協会」を結成。

2月6日、銀座明治製菓で絶対対象派協会発会式を開催。

第1回絶対対象派協会展に出品。「軟風」
日動画廊 5/28-31

9月、「主トシテ二科会展第九室ヲ中心トスル新傾向作家ノ親睦ヲ図リ、併セテ各自ノ研究ニ資ス」との趣意のもと、東郷青児、藤田嗣治、峰岸義一、広幡憲、山口長男らにより創立された九室会に参加。

10月5日、新宿中村屋に於いて九室会創立総会開催。



昭和13年2月 絶対対象派協会発会式(正面左から2人目が鷹山宇一)

- 1939年(昭和14)31歳 第1回九室会展に出品。日本橋白木屋 5/9-15
メンバーは四十人あまりで出品点数は九十余点だが、これらの作品に就いて言へば、吉原治良、山本敬輔、斎藤義重、村田實史雄、広幡憲、井上覚造、山本直武、山口長男等のアブストラクション、桂ゆき子のコラーヂュの構成を描いたもの、シュールレアリスム風のものには故小林孝行、難波架空像を初めとして、中野淑子、鷹山宇一、野尻三郎、遠藤倫太郎、新井ふみ子、浪江勲次郎、伊藤研之等、等、また峰岸義一と高橋迪章とは数個によつての連作的構成の試み、橋本徹郎の写真による構成等に、とにかく、いづれも、前衛的な真摯な追求ぶりを見せ、それぞれの効果を示してゐる。【みづゑ414美術展望台 江川和彦評】
- 九室会を退会し、福沢一郎を中心に、独立美術協会、二科会の前衛作家により組織された「美術文化協会」の創立に参加。
5月17日、銀座アラスカに於いて美術文化協会発会式を開催。
- 1940年(昭和15)32歳 美術文化協会第1回展に出品。「日高川(民族ノ移動ノ内(情炎))」東京府美術館 4/11-19
美術文化協会秋季展に出品。銀座三越 11/26-29
- 1941年(昭和16)33歳 美術文化協会第2回展に出品。「トルグート公ロセダル・チャブ姫」東京府美術館 4/27-5/6
……美術文化協会幹部福沢一郎と美術評論家瀧口修造とが特高警察に検束され、超現実主義者であるということが理由で、反戦思想、容共思想の持ち主ではないかと疑われ、糾問された。フランスの超現実主義者に共産主義者が多かったため、福沢や瀧口も同類ではないかと当局はみたのだ。やがて嫌疑は晴れるが、美術文化は依然当局の監視下だった。……
【二科70年史1914-1943 P206 九室会より】
- 仏印巡回日本画展覧会に出品。日本橋三越 9/9-10 その後タイ、仏印を巡回。
第1回航空美術展に出品。日本橋高島屋 9/13-21
デッサン社主催展出品。「若き花」◇旭泰宏、盛田路一、大宮昇らの新版画会第2回展に出品。資生堂ギャラリー 11/14-16◇第2回芸術文化小品展 12/16-20 銀座青樹社
- 1942年(昭和17)34歳 美術文化協会第3回展に出品。「楊貴」「沼」「行く花」「飛ぶ花」東京府美術館 5/27-6/4
新版画会第3回展に出品。「追憶」資生堂ギャラリー 11/11-13
- 1943年(昭和18)35歳 第二次世界大戦に海軍航空隊員として召集。
- 1945年(昭和20)37歳 二科会再建に際して東郷青児の呼びかけにより会員として復帰。
- 1946年(昭和21)38歳 青森県七戸町の明照保育園に於いて個展開催。
第31回二科展に出品。「失題」東京都美術館 9/1-18
鷹山宇一「失題」はこの作家独自のメチエーを生かす一段の奮起が望ましい。
素材がやゝ常套的を免れてゐない。これは創造版画といふメチエーそのものの古風さと関係なしにいふものである……
【みづゑ494二科会で出会つたもの 瀧口修造評】
- 1947年(昭和22)39歳 第2回絶対対象派協会展に出品。「軟風」「たそがれの歌」「朝」銀座・北荘画廊 10/21-25
……斎藤義重氏の作品は強くはつきりとした表現を示して來たし、廣幡憲氏のフォームは夢のように優雅な美しさだ。鷹山宇一氏の作には神秘的なものが内在しており山本敬輔氏の作にも独自の様式がそなわっている。
【美術文化新聞11/5 絶対対象派展を観る 佐久間善光評】
- 第32回二科展に出品。「黄昏」「少年の日の仏陀」
「めざめ」東京都美術館 9/1-19
元気があるということは、たのしいことだ。今年の二科会は元気がある。みんなはりきっている。一巡して爽快なキモチになつたのは、そのためだろう。ボク一流に、見た感想を書かしてもらおう。一番好きだつた絵は、鷹山宇一氏の少年の日の仏陀(甘いという奴にはいわせておけ)それと今年の二科の中でも一番はりきっている岡田謙三氏の大作二つシルクと春と、大物が二つ出ているが、ボクは春の方をとる。
【美術文化新聞9/15 二科展を見て サトウ・ハチロー評】
- 1948年(昭和23)40歳 春季二科展に出品。「幼年」日本橋三越
鷹山宇一・名久井十九三作品展開催。
「たそがれ」「少年の日の仏陀」「草原」「海峡の歌」「花」「花蝶」「野の裸形」「朝」「水」「薫風」「パリの審判」「おぼろ」「かいこん地」「壺」「平原」「枯木のある風景」青森・八戸商工会議所 6/25-28
新生美術協会主催
7月24日、武井増子と結婚。
東京都文京区本郷に居を構える。
- 第33回二科展に出品。「山のかなたに」「庭園」
東京都美術館 9/1-16
- 1949年(昭和24)41歳 春季二科展に出品。「森」日本橋三越
第3回美術団体連合展に出品。「はまべの歌」東京都美術館 毎日新聞社主催
鷹山宇一・斎藤清創作版画二人展開催。「花と金魚鉢」等 資生堂ギャラリー 10/20-24
第34回二科展に出品。「望郷」「旅愁」「水子」「幻日」東京都美術館 9/1-19



結婚式での鷹山宇一夫妻



婚姻成立契約書

山本敬輔は去年のゲルニカから一步進んだのはいい。鷹山宇一も今年の美しさは光っている。

【読売新聞「二科」と「行動」寺崎浩評】

桂ユキ子氏の「作品」が鋭さをひめて佳作である。別に鷹山宇一氏の「旅愁」「望郷」と石附進氏の「街」と、それに榊山勝氏の裸体をとりあげたい。

【東京日日新聞 二科会と行動展 田近憲三評】

国際美術家クラブ街頭展に出品。歌舞伎座別館 12/12-31

1950年(昭和25)42歳

1月16日、長女・ひばり誕生。
第35回二科展に出品。「荒野の歌」「漂泊の歌」「追憶」東京都美術館 9/1-19

「荒野の歌」(神奈川県立近代美術館蔵)が会員努力賞を受賞。

…………鷹山宇一氏は独自の表現でその意図をはっきりと現そうとしています。
『漂泊の歌』『荒野の歌』『追憶』ともに高踏的な象徴性をもっています。

【美術新聞9/11 二科展の代表作 佐久間善三郎評】

1951年(昭和26)43歳

第3回日本現代美術地方巡回展覧会に招待出品。
二科九室展に出品。「花蝶B」日本橋三越 6/8-14
8月3日、二女・ちどり誕生。
洋画彫刻四人展に出品。青森・弘前商工会議所 8/16-18
出品作家：鷹山宇一、奈良岡正夫、中野桂樹、名久井十九三
鷹山宇一・中野桂樹・名久井十九三・奈良岡正夫・西村健次郎五人展に出品。
青森・八戸市役所 8/24-26
第36回二科展に出品。「たそがれの静物」東京都美術館 9/1-19

1952年(昭和27)44歳

春季二科展に出品。「静物」銀座松坂屋

鷹山宇一氏の「静物」は幻想的な世界を表現して成功し、桂ユキ子の「作品」からは女性のもつ優雅な明るさがみとめられる。

【美術新聞3/3 二科春季展評】

集団彫小品展に出品。神田・竹見屋画廊 2/11-20
第37回二科展に出品。「静物・緑園」「静物・庭園」
「花・蝶」「静物・開墾地」「静物・卓上」
東京都美術館 9/1-19

1953年(昭和28)45歳

青森県七戸町の七戸保健所2階に於いて個展開催。
第4回秀作美術展覧会に招待出品。「花・蝶」(第37回二科展出品) 1/28-2/8 日本橋三越 朝日新聞社主催
この頃、日本経済新聞、朝日新聞、雑誌、書籍等の挿絵を手掛ける。週間教育7月2日号表紙、群像8月号表紙に作品掲載。
春季二科展に出品。「花」「静物」銀座松坂屋
第2回日本国際美術展に招待出品。
東京都美術館 5/20-6/8 毎日新聞社主催
第38回二科展に出品。「草原」「孔雀と少女」「黄昏の街」「山脈」東京都美術館 9/1-19



旧七戸保健所にて

二科会は新しい芸術価値の創造に向かって前進している。〈中略〉鷹山宇一の作品は調子が多少弱くなったけれど「黄昏の街」など詩情がこい…………

【美術新聞10/5 佐久間善三郎評】

…………むしろ同じ叙情を主題にしたものでは、たそがれの都会の屋根を背景にした花びんから五彩の蝶がヒラヒラと飛び立つ鷹山宇一「黄昏の街」の小品ながらきめの細かい愛情に注目すべきでしょう。

【毎日新聞 秋の美術展】

9月30日、三女・くるみ誕生。

1954年(昭和29)46歳

春季二科展に出品。「風」銀座松坂屋
第1回現代日本美術展に招待出品。「静物B」「静物」
東京都美術館 毎日新聞社主催 5/19-6/5
第39回二科展に出品。「馬」「花・蝶」「風景と魚」東京都美術館
第2会場「トルソ」日本橋高島屋 9/1-19

1955年(昭和30)47歳

春季二科展に出品。「遊蝶花」「なぎさ」銀座松坂屋
松木満史、三国慶一、中野桂樹、古藤正雄と青生社を結成。
9月、青生会第1回展開催。青森県立図書館
第3回日本国際美術展に招待出品。「遊蝶・花」「静物」
第40回二科展に出品。「森・静物」「髪」「群蝶」「ふるさと」東京都美術館
第2会場「花・蝶A」「花・蝶B」松坂屋 9/1-19

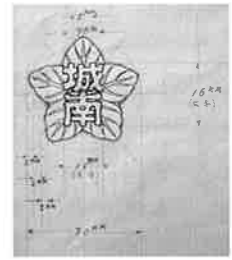


みづる 1954.10 No. 590

1956年(昭和31)48歳

春季二科展に出品。「黒髪」「遊蝶花」銀座松坂屋
第2回現代日本美術展に招待出品。「遊蝶・花」「遊蝶花」「湖畔」「静物」
第41回二科展に出品。「遊蝶・花A」「遊蝶・花B」「群蝶」「花束」「少女」東京都美術館 9/1-19

- 1957年(昭和32)49歳 春季二科展に出品。「遊蝶花」文芸春秋画廊
第4回日本国際美術展に招待出品。「花園の少女」
第42回二科展に出品。「静物」「遊蝶・花(A)」「遊蝶・花(B)」
東京都美術館 9/1-19
この年発行された「フランダースの犬」(岩波少年文庫)の挿絵を手掛ける。
- 1958年(昭和33)50歳 春季二科展に出品。「遊蝶花A」「遊蝶花B」池袋西武
第3回現代日本美術展に招待出品。「遊蝶・花」「早春譜」
第43回二科展に出品。「まぼろし」「牧歌」東京都美術館 9/1-20
- 1959年(昭和34)51歳 2月、二科会とサロン・ド・コンパレゾンとの交換展に出品。
「遊蝶花」パリ国立近代美術館
第5回日本国際美術展に招待出品。「波濤の歌」
第44回二科展に出品。「遊蝶花」東京都美術館 9/1-20
- 1960年(昭和35)52歳 第4回現代日本美術展に招待出品。「波濤」
第45回二科展に出品。「港と魚」「港と花」「遊蝶・花」
東京都美術館 9/1-20
- 1961年(昭和36)53歳 二科会は理事制を敷き、東郷青児理事長のもと理事に就任。
第6回日本国際美術展に招待出品。「Evening Song」「Flower
and Butterfly」
第46回二科展に出品。「河」「孔雀と少女」「花影」
東京都美術館 9/1-20
- 1962年(昭和37)54歳 第47回二科展に出品。「赤い風船」「遊蝶・花」「湖」
東京都美術館 9/1-20
第5回現代日本美術展に招待出品。「早春譜」
- 1963年(昭和38)55歳 第48回二科展に出品。「遊蝶花」「緑陰」「あざみ咲く野」
東京都美術館 9/1-20
第7回日本国際美術展に招待出品。「孔雀と少女」
七戸町立城南小学校校章図案作成。
- 1964年(昭和39)56歳 青森県褒賞を受賞。
第6回現代日本美術展に招待出品。「遊蝶花」「草原・静物」で
最優秀賞受賞。
第49回二科展に出品。「草原・静物」「遊蝶・花」
東京都美術館 9/1-20
- 1965年(昭和40)57歳 二科会五十周年記念回顧展に出品。「朝あけの歌」「海と花」
新宿ステーションビルディング 6/23-7/8
第50回二科展に出品。東京都美術館 9/1-20
「荒野の歌」を神奈川県立近代美術館が作品買い上げ保存。
- 1966年(昭和41)58歳 第51回二科展に出品。「森と花」「海と貝殻」。青児賞を受賞。
東京都美術館 9/1-20
二科新秋展 '66に出品。「湖畔の千草」
第7回現代日本美術展に招待出品。「波濤」
国際形象展に招待出品。「高原」日本橋三越
七戸町立七戸幼稚園園章図案作成。
- 1967年(昭和42)59歳 第52回二科展に出品。「高原・湖」「高原と花」。総理大臣賞を
受賞。東京都美術館 9/1-20
二科新秋展 '67に出品。「花と遊蝶」
第17回五都連合新作画展覧会に出品。「花・遊蝶」
- 1968年(昭和43)60歳 東奥日報八戸支社落成記念 鷹山宇一個展開催。
東奥日報八戸支社5階ホール 5/19-26 南天子画廊主催
第53回二科展に出品。「森の風船」「光の中に」
東京都美術館 9/1-20
第9回京橋会油絵展に出品。「花と蝶」(以後ほぼ毎年出品)京橋画廊
- 1969年(昭和44)61歳 第54回二科展に出品。「夜明けの花」「朝の森」東京都美術館 9/1-20
春律会展 '69に出品。「静物」春風洞画廊
二科新秋展 '69に出品。「河」
美術雑誌「みつゑ」7月号No. 774「作家登場」で鷹山宇一を特集
- 1970年(昭和45)62歳 芥川賞受賞作家清岡卓行著「アカシヤの大連」(講談社発行)の表紙装画を手掛ける。
二科新秋展 '70に出品。「ばら」
春律会展 '70に出品。「尖塔のある風景と花」春風洞画廊
第20回五都連合新作画展覧会に出品。「花」
- 1971年(昭和46)63歳 第56回二科展に出品。「緑陰の花」東京都美術館 9/1-20
第21回五都連合新作画展覧会に出品。「花」



城南小学校校章作図法



1959年(昭和34年)第44回二科展にご来場の皇太子殿下(今上天皇)にご説明する鷹山宇一(後ろ向き)。右端は東郷青児。鷹山先生は緊張でいっぴくポケットから櫛などを出してソワソワしていたとのこと。



七戸幼稚園園章作図法



「みつゑ」1969.7 No. 774

1972年(昭和47)64歳
 1973年(昭和48)65歳
 1974年(昭和49)66歳
 1975年(昭和50)67歳
 1976年(昭和51)68歳
 1977年(昭和52)69歳
 1978年(昭和53)70歳
 1979年(昭和54)71歳
 1980年(昭和55)72歳
 1981年(昭和56)73歳
 1982年(昭和57)74歳
 1983年(昭和58)75歳
 1984年(昭和59)76歳
 1985年(昭和60)77歳
 1986年(昭和61)78歳

第57回二科展に出品。「虹と花」東京都美術館、上野の森美術館 9/1-20
 東美会展 '72に出品。「高原の馬」春風洞画廊

第58回二科展に出品。「森の花」東京都美術館、上野の森美術館 9/1-20
 '73二科選抜展に出品。「緑陰の静物」北辰画廊
 薔薇画廊十周年記念展に出品。「高原の馬」銀座薔薇画廊 11/5-17
 東京都中野区のマンションに転居。終の棲家となる。

第59回二科展に出品。「沼」東京都美術館、上野の森美術館 9/1-20

第60回二科展に出品。「海浜の花」
 東京都美術館 9/2-20

第7回東美会展に出品。「たそがれの花」
 春風洞画廊
 第26回五都連合新作画展覧会に出品。「花と海」

第3回Petit Juin(小さな六月)展に出品。(以後ほ
 ぼ毎年出品) 銀座薔薇画廊 6/7-11
 第27回五都連合新作画展覧会に出品。
 「高原の夜明けと花」

二科会東郷青児会長逝去。

第28回五都連合新作画展覧会に出品。「雲の街と花」
 薔薇画廊開廊十五周年記念展「柏展」に出品。銀座薔薇画廊 11/6-11
 霜月会新油絵展に出品。(以後ほぼ毎年出品) もりもと画廊 11/6-11
 第63回二科展に出品。「波濤の歌」東京都美術館、上野の森美術館 9/7-24

二科会は社団法人二科会として発足し、吉井淳二理事長のもとと事に就任。(1998年より名誉理事)
 春宏会新油絵展に出品。(以後ほぼ毎年出品) もりもと画廊 4/16-25
 第29回五都連合新作画展覧会に出品。「港の花」
 京橋画廊二十五年展に出品。「海辺の花」京橋画廊 6/4-16
 第64回二科展に出品。「流紋」東京都美術館、上野の森美術館 9/7-24
 第10回東美会展に出品。「木立の花」春風洞画廊
 柏展に出品。(以後ほぼ毎年出品) 銀座薔薇画廊 11/12-17

第11回東美会展に出品。「港の花」春風洞画廊 2/18-23
 織田広喜 鷹山宇一 吉井淳二 三人展を開催。泰明画廊 4/21-26
 第30回五都連合新作画展覧会に出品。「高原の馬」
 第65回二科展に出品。「海浜の花」東京都美術館、上野の森美術館 9/7-24
 日美展(旧日本美術学校卒)に出品。松屋銀座 9/12-17
 出品作家：織田広喜、桜田精一、鷹山宇一、円鍔勝三、鶴岡義雄、西村龍介、服部正一郎、
 日野耕之祐、三浦俊輔、宮崎進
 現代有名作家洋画小品展に出品。(以後ほぼ毎年出品) 日本橋三越 11/25-30

青嶺会油絵展に出品。松屋銀座 5/8-13
 第12回東美会展に出品。春風洞画廊 5/18-23
 第31回五都連合新作画展覧会に出品。「高原の花」
 第16回京橋会に出品。「晨」京橋画廊 6/17-27
 二科会東美展に出品。「朝の花」渋谷東急本店 7/2-8
 出品作家：吉井淳二、鷹山宇一、織田広喜、鶴岡義雄
 第66回二科展に出品。「高原の花」東京都美術館、上野の森美術館 9/2-18
 青光社の五人展に出品。「林」「めざめ」「蝶と花」「高原の馬」「風景・静物」「静物」「遊蝶の花」「早春」「海洋
 と花」「たそがれ」「月に吠える牛」「遊蝶の花」「花と窓外」「桃」「花と蝶」「不二緑」
 青森市民美術展示館 9/9-15 出品作家：棟方志功、松木満史、下沢木鉢郎、古藤正雄、鷹山宇一
 尚美展 '81に出品。「朝の花」
 日西ギャラリー開廊一周年記念日西会展に出品。日西ギャラリー 10/19-30

現代洋画小品展に出品。大阪阪急 3/12-17 ◇青嶺会油絵展に出品。「入江と花」松屋銀座 5/7-12
 第67回二科展に出品。「湖畔の花」東京都美術館、上野の森美術館 9/1-18
 第7回現代洋画壇新作展に出品。池袋西武 12/10-16
 靖雅堂夏目美術店創業50周年記念展に出品。東京セントラル美術館 12/15-19

青嶺会油絵展に出品。「海辺の花」松屋銀座 5/6-11
 第68回二科展に出品。「夜明けの静物」東京都美術館、上野の森美術館 9/1-18

第6回昭彩会展に出品。昭和画廊 1/16-28
 春季二科展に出品。「海に見える静物」伊勢丹美術館
 第69回二科展に出品。「海辺の花」東京都美術館、上野の森美術館 9/8-24
 青嶺会油絵展に出品。「緑陰の花」松屋銀座
 尚美展 '84に出品。「湖畔の花」

第26回星座の会に出品。関西画廊 7/5-9
 第70回二科展に出品。「蒼原ノ季節」東京都美術館、上野の森美術館 9/8-25
 70回記念二科回顧展に出品。大丸東京店、名古屋三越栄本店、大阪近鉄阿倍野店

春季二科展に出品。「蒼原の静物」松屋銀座 4/11-16
 第71回二科展に出品。「港の花」東京都美術館、上野の森美術館 9/1-15



東郷青児氏らと(左から2人目)

- 1987年(昭和62)79歳 第72回二科展に出品。「高原ノ静物」東京都美術館、上野の森美術館 9/1-16
尚美展 '87に出品。「海浜の花」
- 1988年(昭和63)80歳 春季二科展に出品。「緑陰の静物」松屋銀座 3/25-30
第73回二科展に出品。「海浜の静物」東京都美術館、上野の森美術館 9/1-16
尚美展 '88に出品。「海浜の花」
- 1989年(平成元)81歳 第74回二科展に出品。「ドッグの花」東京都美術館、上野の森美術館 9/1-16
尚美展 '89に出品。「港の花」
「蝶の夢・貝の幻 1927-1951」展に出品。「荒野の歌」
北海道立函館美術館 4/8-5/14 北海道立三岸好太郎美術館 5/20-6/18
- 1990年(平成 2)82歳 七戸町名誉町民の称号を受ける。
春季二科展に出品。「早春賦」(鷹山宇一記念美術館蔵)松屋銀座 3/28-4/2
第75回二科展に出品。「夜明けの静物」東京都美術館、上野の森美術館 9/1-16
二科75-伝統と展望一展に出品。「荒野の歌」(神奈川県立近代美術館蔵)
尚美展 '90に出品。「海浜の花」
- 1991年(平成 3)83歳 第76回二科展に出品。「高原の静物」東京都美術館、上野の森美術館 9/1-16
- 1992年(平成 4)84歳 春季二科展に出品。「湖畔の花」松屋銀座 3/18-23
第77回二科展に出品。「緑園の静物」東京都美術館、上野の森美術館 9/1-16

鷹山宇一画伯とは四十年来の知己である。二科会に写真部を創設して以来、毎年出品作を拝見しているが、鷹山宇一調には些かの變化もない。驚くべき純粹さというべきか、呆れ果てた無精者と言うべきか、なのである。尤も私は前者を採る。

花蝶果物そして背景には夾雑物の一切入らないダーク・グリーンと美しい色調の空が垣間見える。勿論仔細にみれば画伯独自の工夫を凝らしているのがわからぬでもない。只一度白鳥を描いたクラシックな出品作を記憶しているが、これは格調の高い傑作だったと今でも思い出している。

青森県七戸町出身の頑固な根性を些かも傷つけられることなく干支を七巡した画伯に私は拍手を贈りたい。三十数年前四号の小品を頒けて戴いたことがあるくらいだから私自身大ファンなのである。この小品は今年干支を五巡した高名な女優の手に渡った。買った絵を売らない主義の私にとってただ一度の悔恨だったが、美女の懇望に弱いのは当然だし、鷹山宇一画伯のかくれファンが絶世の美女(嘗ての)であったことに画伯は北叟笑んでいる事であろう。

【月刊美術1992.No198秋山庄太郎の「現代日本の作家たち」秋山庄太郎評】

撮影：秋山庄太郎氏

- 1993年(平成 5)85歳 春季二科展に出品。「小さな世界」松屋銀座 3/17-22
微画廊開廊30周年記念「作家と薔薇」展に出品。
「海浜の花」銀座薔薇画廊 5/13-25

カナで書くとなんとも味気ないが、「檸檬」「葡萄」「葦」「薔薇」などは、なんと優雅で節度のある上品な書体であろうか。とくに、「薔薇」は字を見ただけで、ロココ調の華やかな文化の香りがほのかに匂い立ってくる。色彩も、「幼い少女のピンクのドレス」、「純白の花嫁」、「ルージュをひいた文明開化時の貴婦人」と、実にさまざまなイメージが浮かんでくる。高貴で艶やかな薔薇の花に、哀愁漂う孤独な姿を見いだすのも楽しみな美の発見である。

【「作家と薔薇」展によせて 鷹山宇一】

- 1994年(平成 6)86歳 春季二科展に出品。「黎明の静物」松屋銀座 3/16-21
鷹山宇一記念美術館開館記念個展開催。銀座・永井画廊 5/23-6/2
青森松木屋 6/9-14

8月1日青森県七戸町に「七戸町立鷹山宇一記念美術館」開館。
記念式典には写真家秋山庄太郎、二科会会員諸氏と共に列席。

開館記念特別企画「鷹山宇一・秋山庄太郎二人展」を開催。

- 1995年(平成 7)87歳 春季二科展に出品。「明けゆく森の花」松屋銀座、
ザ・クレストホテル津田沼、鷹山宇一記念美術館
第80回二科展に出品。「漂渺夢幻」東京都美術館、上野の森美術館 9/1-16
第80回記念二科回顧展に出品。「荒野の歌」(神奈川県立近代美術館蔵)
東京大丸ミュージアム、大阪なんば高島屋
青森県近代版画のあゆみ展に出品。「編み物をする女(仮題)」青森県立郷土館 9/14-10/10

- 1996年(平成 8)88歳 3月10日青森県七戸町教育委員会主催による美術講演会「鷹山宇一との思い出」(講師 佐藤米次郎氏)を開催。柏葉館多目的ホール

「……鷹山宇一さんという方は、東京に行かれても非常に細かい仕事をする人なので、私が東奥日報社に入社したとき、ちょうど支那事変、満州事変が起こった時で、よく地図なんかを新聞

鷹山宇一記念美術館



美術館開館ポスター



美術館前で秋山庄太郎氏と談笑

に描かされるんですね。その地図を描くのに、どういうペンでどういう風な描き方がいいのかしらということをおね、聞きに行ったものですよ。するとね、懇切丁寧に教えてくれるんですね。私はそれを見習って相当細かい仕事を描いて、私の仕事の役に立ったことを覚えています。」

【講演会「鷹山宇一との思い出」より 版画家佐藤米次郎氏談】

春季二科展に出品。「陽炎の季節」松屋銀座、鷹山宇一記念美術館、ザ・クレストホテル津田沼

1997年(平成9)89歳

春季二科展に出品。「古城幻影」松屋銀座、ザ・クレストホテル津田沼、鷹山宇一記念美術館
七戸町立鷹山宇一記念美術館において開館3周年記念「鷹山宇一の世界展～心象、その原点」を開催。
9月「鷹山宇一画集」刊行 (財)鷹山宇一記念美術振興会

1998年(平成10)90歳

1月23日デーリー東北新聞社より「第26回デーリー東北賞」受賞。

春季二科展に出品。「郷愁都市」二科最後の出品となる。松屋銀座、ザ・クレストホテル津田沼、
鷹山宇一記念美術館
鷹山宇一卒寿記念展開催。東京国際美術館 4/29-5/17



卒寿記念展の茶話会で挨拶

初期から最近までの油彩画のほか、これまで一般には未公開となっていた
デッサンや、昭和初期に制作された木版画などが展示された。

「……絵描きになりたいと、この道を歩み始めて75年の歳月が流れま
した。作品一点一点を、今見入ると当時の思いが走馬燈のように駆け巡
ってまいります。(中略)今、来し方を振り返りますと、消し去りたい
恥ずかしい事はばかりであります、たった一つ私には自負できる【絵描
魂】がございます。それは、自分ほど、デッサンを勉強した者はいない
だろう、と言い切れることでもあります。(中略)若い時の蓄えが、血や
肉となって、90歳の私の仕事を支えてくれているのです。(中略)絵筆
一本の正堂堂の人生を歩ませて戴き、本当に有り難うございました。
……」

【卒寿記念展の茶話会における挨拶より】

12月2日東奥日報社より「第51回東奥賞特別賞」受賞。

「……本年、年始めに、やはり受賞の喜びで始まり、春には卒寿展開催、夏には金婚式を迎え、
そして、年のおさめにこのような大きな賞を頂き、平成10年は、私にとって忘れることができな
い月日となりました。……」

【東奥賞特別賞受賞の際の挨拶より】

1999年(平成11)90歳

「鷹山宇一の素描展～静謐のレズン・デートル～幻のデッサンたち」開催。
七戸町立鷹山宇一記念美術館開館5周年記念展 7/17-9/5

「華麗なる女性像—鈴木コレクションの世界—」に油彩画3点展示。八戸市立美術館

10月25日午後2時13分逝去

12月10日「町民葬 七戸町名誉町民 故鷹山宇一氏を偲んで」が鷹山宇一記念美術館で執り行われる。

爾来、鷹山宇一の誕生日である12月10日を「遊蝶記」と名付け、先生を偲ぶ会を開催中。

◆このほか、個展・グループ展等多数開催。鷹山宇一逝去後の展覧会出品歴は、下記のとおり。

2000年(平成12)

東京都 板橋区立美術館・宮城県立美術館主催「TOHOKU/TOKYO 1925-1945」に木版画4点出品。

2001年(平成13)

八戸市立美術館主催「石橋宏一郎をめぐる画家たち」に木版画、油彩画14点出品。

2004年(平成16)

千葉市美術館主催「日本の版画・1931-1940・棟方志功登場」に木版画2点出品。

2005年(平成17)

青森県立郷土館主催「東奥美術展の画家たち—青森県昭和前期の美術—」に油彩画2点出品。

2006年(平成18)

群馬県立館林美術館主催「夢のなかの自然—昭和初期のシュールレアリスムから現代の絵画へ—」に
木版画3点出品。

2007年(平成19)

青森県立郷土館主催「花の肖像画—植物を描いた青森の人々—」に素描画・木版画・油彩画4点出品。

滋賀県立近代美術館主催「天体と宇宙の美学」に木版画1点出品。

2008年(平成20)

七戸町立鷹山宇一記念美術館において、鷹山宇一生誕100周年記念展「宇一が愛した西洋ランプ/故郷
に帰った作品たち～今、いつかの、預かりもの～」開催。4/27-8/31

【本年譜は、『画集鷹山宇一の世界』(財団法人鷹山宇一記念美術振興会 1997年発行)掲載の
成田昌徳氏(元鷹山宇一記念美術館職員)編集の年譜をもとに、加筆修正を加え再編集したもの
である。記して謝意を表する。】

青森県立郷土館
「ジュディ・オング 倩玉展」
会員35名 素晴らしい版画に 魅せられて！

ジュディ・オング展に寄せて

七戸町 瀬川新吉

この度は美術館友の会のジュディ・オング倩玉木版展参加させて頂き有り難うございました。私が先ず第一に思いましたことは、自分一人で参観するより目的の地まで安心していけること、第二は途中仲間と色々楽しいお話が出来ること、第三は友の会の会長や世話人の方の親切



「祇園白川」

(Sakura of Kyoto Gion Shirakawa)

2004第80回記念白日出展作品

画寸 1071×833

©HEEMORY/STEPeast

な配慮により買い物など参加者を喜ばせ、感謝申し上げます。

さて目的の郷土館会場に着いて作品の展示も分かり易く説明書も行き届いており、私は最初は有名な芸人なので作品はどうかと思っていた分もありましたが、作品一つ一つに魂が吹き込まれて観る者に迫る様な感じが致しました。私も少し水墨画を描いたりしている関係上、白黒での表現では水墨と同じなどところを色々と感じましたが、刃により切り出す線の鋭さや独特な美しさは版画で

なければ出せないし、あの美しい容貌から想像できない美術感覚に驚きと感動を受けました。

なお、花などの作品はよく花の特徴を捉えて絵になる花の選択をして、色彩の華やかな洋蘭、東洋的なあやめ等の花の特徴を引き出して私達の心を引き留める本当眼福を高めるものでした。又、日展特選の「紅楼依緑」は日本建築のよさを十二分に捉えて構図や要点の色彩のほどこし方等々、本物に触れて本当に幸せを感じました。女優として歌手として超多忙な日々と思いますが、版画作りに打ち込む溢れる意欲に我々の人生の目的のなさを強く感じました。今後ともこのような美術鑑賞の機会をご期待申し上げ、スタッフの皆様に深く感謝を申し上げます。

ジュディ・オング 倩玉に

魅せられて

七戸町 井上早苗

会場に入るとまず初期の作品「つばき」が飾ってあり「私にも出来そう」と思いましたが、奥へ奥へと進んでいくうちに細部にわたる彫りの丁寧な作品に見ほれていました。

同じ線でも濃淡で別々に板を彫らなければならぬ木版画。少なくとも一作品に五枚くらい？（指を折って数えたけれどわからないんだなあ）

その中でも私が心惹かれた二枚が



郷土館ホールで記念写真

あります。日本家屋のガラス窓にちよこつと映った庭の景色で、すつきりとした窓の透明感が感じられる「華堂初夏」、木の枝に降り積もった雪の柔らかなさを感じられる「銀閣瑞雪」。(たった黒と白の二色でどうして表すことが出来るんだらう・・・私には無理だわ!)彼女の努力と根性に感服させられました。こうした催し物は個人ではなかなか来ることが出来ません。計画を立てて下さっている主催者は大変でしょうが、友の会で連れて行ってもらえるのは本当に有り難いです。会員の皆様の話題は豊富で毎回お会いできるのが楽しみです。それに食事も美味しい所に連れて行ってもらうのです。出来るものならもつと回数を増やして欲しいなあ。

第4回海外研修旅行 充実の台湾4日間好評募集中

故宮博物院と美食の旅

友の会特別企画、第4回海外研修旅行「充実の台湾4日間」の参加者を募集中です。旅行期間は平成21年5月21日（木）～5月24日（日）の4日間。昨年リニューアルオープンしたばかりの世界4大博物館の一つ「故宮博物院」をじっくりと見学いただけます。また、グルメのテーマパーク台湾ならではの美味しい食事をご用意しています。まだ定員に若干の余裕がございますので、お早めにお申し込み下さい。



世界一の中国美術工芸コレクションとして名高い故宮博物院。世界四大博物館の一つに数えられ、創設80周年となる2007年2月にリニューアルオープン。

詳しいお問い合わせは美術館まで。

募集締切は **平成21年2月28日(土)**です。

友の会会員登録の更新と 新規会員登録入会お誘いのお願い

本年も会員の皆様には、友の会運営に多大なお力添えをいただき、誠に有難うございます。
新年度も鷹山宇一記念美術館の応援と会員の皆様方に芸術・文化に一層親しんでいただけるよう研修旅行、講演会などを企画し、微力ながらも地域文化に寄与していく所存でございます。本号に年度更新の振替用紙を同封いたしましたので、各位のご協力をお願いいたします。

○友の会事業内容

- ① 県内外美術館鑑賞旅行（年2～3回）
- ② 海外美術館研修旅行（00年スペイン・パリ、04年イタリア、07年南仏・パリ）
- ③ 美術館作品購入基金への協力
- ④ 鷹山宇一記念美術館ボランティア協力
- ⑤ 会報の発行
- ⑥ その他（美術講演会の開催等）

○一般会員

会費(個人) 年度会費3千円

特典

- ① 無料入館券3枚。会員証提示により入館料2割引
- ② ミュージアムグッズ1割引
- ③ 研修会、講演会への招待、優待
- ④ 他美術館等の視察研修への優待参加
- ⑤ 会報の配布

○特別会員

会費(個人・法人) 年度会費1万円

特典

- ① 会員証提示により個人・法人会員とも本人及び同伴者1名まで無料入館
- ② 新規加入の方に画集1冊贈呈

○賛助会員

会費(個人・法人) 年度会費2万円

特典

- ① 会員証提示により個人・法人会員とも本人及び同伴者3名まで無料入館
- ② 新規加入の方に画集1冊贈呈
- ③ 特別企画展の都度、招待券を贈呈

■詳しくは、美術館までお問い合わせ下さい。

会費納入についてのお知らせ

★会費の納入は、随時受け付けておりますが、10月1日以降に新規会員となった方は、翌年の3月31日までの会費となります。

編集後記

★今号は、鷹山宇一誕生一〇〇年記念特集号です。
★当館学芸員の論文や今では入手困難となった美術誌に掲載された鷹山先生に関する論文、二科会出品作品の紹介、年譜等を掲載しました。同封のDVDとともに鷹山芸術への理解を深めるためにお役に立てれば幸いです。
★鷹山ひばり館長が明年から青森県立美術館の館長に就任することになりました。これまでの友の会へのご厚情、ご協力に感謝しつつ、本県美術の振興発展に一層寄与されるようご祈念申し上げます。
★平成21年、会員の皆様にとって良い年でありますように。

(E・T)